60-1451
1200501273098

始

納本

60
1451

診療簿から拾った話

小村[illegible]兒

父と母に捧ぐ

装幀
挿畫
竹村猛兒

診療簿から拾つた話

竹村猛児

帝國圖書館藏
昭和十二・三・十九・納本
帝圖

60
1451

序

私は田舍で育つた。幼ない頃、砂利置場に行つて小石拾ひをして遊んだ事がある。澤山の小石の中から形のいゝのや色の美しいのを拾ひ別けて喜んだ。

大きくなつて醫者になつた私は診療簿の中から面白い話や悲しい話を拾ひ上げて書いて見た。

そして此の本が出來た。

診療簿から拾つた話

目次

柿の木　一
だつこ　四
バナナ　六
蔭口　九
謠曲　一二
火傷　一四
自殺　一六
はしか　一八
抜け毛　二一
猫　二六
聾啞　四四
復讐　四六
投書　五〇

占ひ　五三
喘息　五六
變死　六三
豫防注射　六四
誤診　六八
糖尿病　七五
保菌者　七六
忘れられぬ男　八五
壹萬圓　九〇
銅貨　九三
お春の葬式　九五
クループ性肺炎　一〇三
見舞　一〇五
誤診　一〇九
娘の幸福　一一三
運・不運　一一五

鑵　一二九
橋　一三三
負ふて歸る　一三五
或る醫者の死　一三七
市松模樣　一四一
使ひ　一四四
指の跡　一五一
しびれ　一五五
僻み　一五八
辨當箱　一六三
コックリさん　一六五
スキー　一七三
凍傷　一七七
泣き聲　一八二
千人に一人　一八八
老人科　一九八

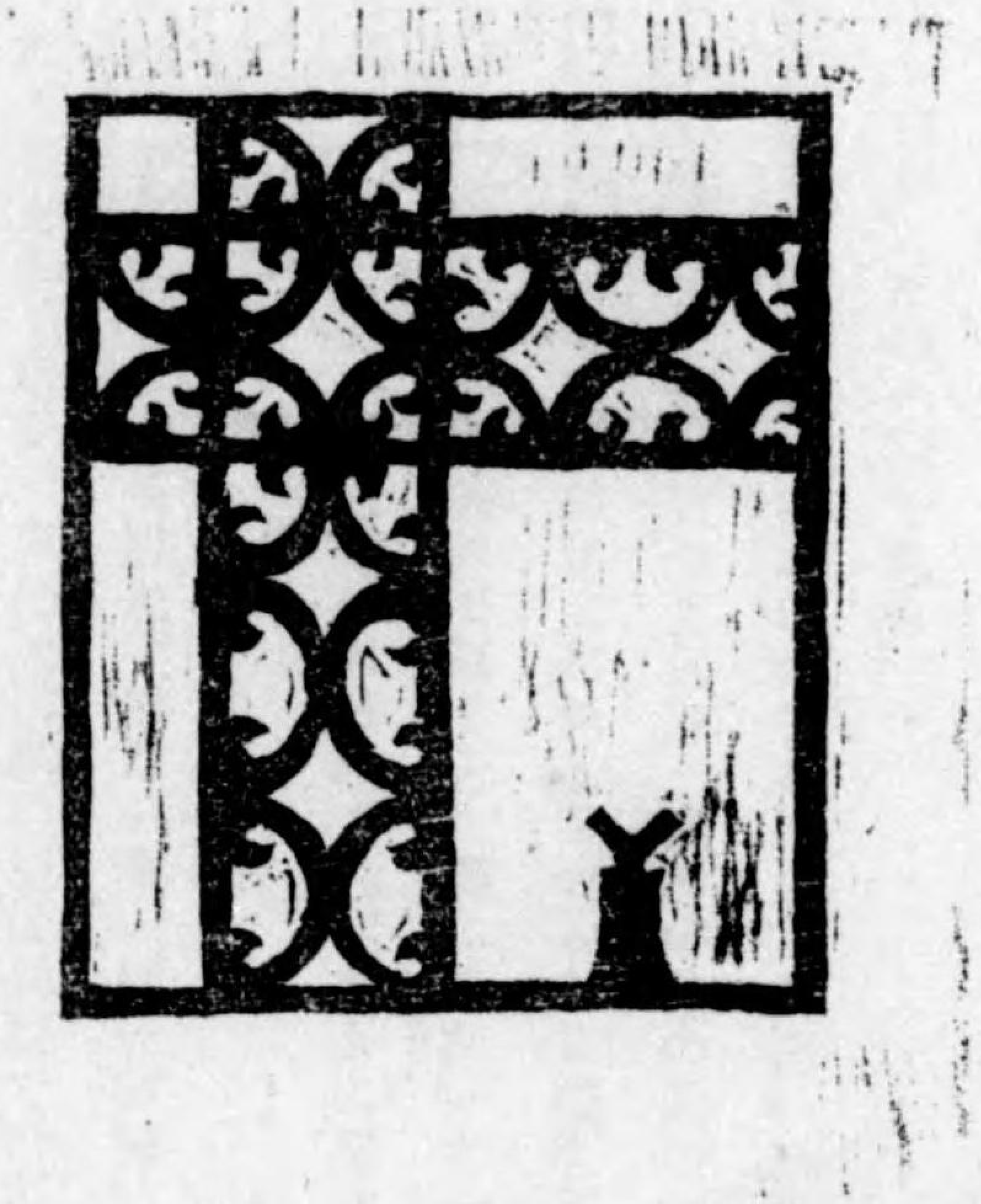
肩の凝り　二〇〇
寫眞　二〇七
幽靈　二一五
兎の目　二二六
腦膜炎の子と其の父　二三二
土工の子　二三五
方角　二四一
自動車　二四七
讃美歌　二五四
兄弟　二五九
便祕　二六八
盲腸炎　二七二
隣席の男　二七八
强引　二八三
行方　二八七
石油　二九〇

お稲荷様　二九三
掏摸と包み　二九六
ウエハース　二九八
或る往診　三〇一
死を弄ぶ　三〇六
噴嚏　三一一
位牌　三一五
洋服　三一九
結核菌　三二〇
お茶　三二三
筆　三二九
入院と病氣　三四六
癖　三五四
近眼　三六〇
嫉妬　三六五
現滅　三七〇

辨當泥棒　三八二
隣り同志　三八九
生死不二　三九八
足　四〇三
月曜病　四〇八
蛔蟲　四一一
旅藝人　四一四
診斷書　四一七
錯覺　四二二
戰死　四三一
車　四三五
椿　四四三
肺臟ヂストマ病　四四六
診察時計　四五一
變死　四五八
豫防注射　四[illegible]〇

挿畫目次

バナナ　六
猫　三六
一萬圓　九〇
運・不運　一二四
市松模樣　一四二
コックリさん　一六六
寫眞　二〇八
兄弟　二六〇
ウエハース　二九八
位牌　三一六
近眼　三六〇
足　四〇三



柿の木

柿が朱く色付いた頃の話である。

往診を頼まれて行つた家の庭に大きな柿の木が黒い鮹の足の様に枝を張つて枝もタワヽに朱い柿の實が實つて居た。明るい色の其の柿が暗いジメ〳〵した庭の一隅に四方に足を延した巨大な怪物ででもある様な氣がして却つて無氣味に感じられた。部屋の中も其れで無くとも膚に冷たい十一月の空氣の中に水の中にでも居るのでは無いかと思はれる様な冷氣が身に浸みてゾツとした惡感を感じた。

暗い佛壇の下に病兒が寢て居た。冷たい薄い固い蒲團に包まれて枯枝の様に瘦せ細つた手足をして居た。其の上に其の兒は斜視で口が歪んで居るために骸骨が突つて居る様な氣がした。

病氣は赤痢で到底恢復は覺束無い程の重態である。病兒の傍にションボリと影の樣に座つて居る母親に其の由を告げて屆ける事にした。

屆けて未だ病院から迎ひに來ない內に容態が惡化して其の兒は死んで了つた。死んでも其の歪んだ顏は丁度醫者や家人を嘲笑して居る樣に見えた。其の家は主人が放蕩をして家に歸る事が殆んど無く、其の子供は先天性黴毒で、姑が嫁を虐待すると云ふ評さのある冷たい陰慘な家庭であつた。

子供の葬式が出た晩に再び其の家から迎ひが來た。

影の樣な其の母親が庭の隅の柿の木に首を吊つて死んで居た。低い枝に下つた其の屍體は足の爪先が地面にスレ〴〵に付いて居るために延び切つて恐ろしく脊の高い人が柿の木の下に立つて居る樣に見えた。病弱な兒でも其の兒一人が慰めであつた此の人が總べての望みを世の中から失つた哀れな最後の姿であつた。其の苦しみに延びた顏は親子とは云へ先日死んだ病兒の引き歪んだ死顏

にソツクリで賴り少ない愛兒の後を追つて其の身に辛く當つた夫と姑を嘲笑しつゝ死んで行つたとしか思はれなかつた。

其の後幾何も經たぬ中に其の家族は其の家を越して行つた。

其の後に這入つた人も長くは居住まはず二人も三人も變つて行つた。

家主は庭一杯に枝を廣げた柿の木を切つて了つた。

子供と妻を一緒に失つた初めの男は一年後に氣が狂つたと云ふ評さを風の便りに聞いた。

だつこ

加答兒性肺炎で丸二月絶對安靜を守り續けて居た二歳の子が居た。

其の子は口が利かれなかつたが時々手を差し延べて其の母親にだつこをして貰ひ度そうにした。

「先生、だつこをしてやつてはいけないでせうか？動かさない様にソーッと。」

診察が濟むと母親が時々私に聞いた。然し其の兒の容態は非常に惡くてとても其の願ひは聞き入れてやれそうも無かつた。

「もう少しよくなる迄は……」私の答へが何時も同じであつた。

子供は段々に衰弱して惡くなつて行つた。もう大きな聲を上げて泣く元氣も無く時々細い手を力無く上げて痩せて殊更大きくなつた目で力無く其の母親の顏を訴へる様に見上げるのであつた。

窓のカナリヤが寒さに震へて鳴かない日に子供の容子が急變した。私が驅け付けた時には脉が殆んど觸れなかつた。見て居る中に蠟燭が燃え切る様に次第に子供の命脉は細く微かになつて今にも消えそうになつた。

「だつこしてやつてもいゝでせうね、先生、もう駄目らしいですから。」

と母親が云つた。

「いゝでせう。」最後の注射をし終つて私が云つた。母親は飛び付く様に子供を抱き上げた。が子供はもう目を開かなかつた。そして火の消え落ちる様に其の母親の腕の中で最後の呼吸を引き取つた。

「もつといゝ所へ行らつしやい。そして今度はもつと强くなつて生れて來て頂戴ね」こう云ふ母親の目からは淚の滴が止め度も無く子供の頰の上にはふり落ちた。死ぬ迄も求めただつこは遂に生ある中には叶へられず初めて許された時は遂に歸らぬ死兒を抱く空しきだつことなつて了つた。

バナナ

子供がバナナを食べれば死んで了ふと日頃嚴格な家人に云ひ聞かせられて居た子供が居た。バナナは大人が食べれば大丈夫だが子供が食べれば病氣になつて死ぬと子供自身も考へて居た。併し大人がバナナを旨そうに食べて居る時には固く禁せられて居るだけに殊更强い魅惑を子供心に抱いて居た。

或る日、來客の後、臺所に下げられた果物皿の上に常日頃、一種の尊敬に似た好奇心さへ感じて居たバナナが然も二本愼ましやかに載つて居た。

「サア坊ちやん、私を食べて下さい。美味しいですよ、私は。早く食べて見て下さい。」

子供の耳にはバナナが自分にそう囁くとさへ思はれた。惡い事に其の時臺所には女中も誰も居なかつた。

機會は今だ。子供は强い誘惑に引かれてバナナを食べた。二本共食べて了つた。

日暮方、子供の父が家に歸つた時に何時も喜んで飛んで迎へる筈の子供の姿が見えなかつた。

「坊やはどうしたんだらう。」

父が不思議に思つて探して見ると子供はもう自分のベットの中に這入つて寢て居た。

「坊やはどうかしたのかい？」

父が訊ねると子供は悲しそうに答へた。

「どうもしない。」

「どうして寢て居るんだい。」

此の時子供は非常に悲しそうに答へた。

「僕、死ぬんだもの。」

「どうして？」

「だつて僕バナナを食べたんだもの。」

子供の目には自分がもう死ぬと思ひ定めた純眞な涙が光つて居た。

幸に子供は胃腸を害さずに無事濟んだ。

父が後で子供に。

「バナナは美味しかつたかい？」

と訊くと子供は遠い所に憧れを持つた人の様に目を輝かして答へた。

「とても美味しかつた。」

だが其の後、子供は自分からバナナを慾しいとは云はなかつた。

蔭口

口喧しい患者があつた。

或る時、其の家の子供が大腸加答兒を起したので人手の不足な事や手當の不行屆があるといけないと思つて家人に勸めて入院させた。

經過が順調に行つたために三週間近くで其の兒は全快して退院する事が出來た。

別の人から其の患者の主人が、

「彼の醫者は非道い奴だ。其んなに惡く無い病氣を大袈裟に云つて入院させたのだ。多分病院と結託して居るんだらう。」

と云つて居る話を聞いた。

其の後は掛らないのかと思つて居ると半年程して又呼びに來た。

矢張り同じ子供で今度は疫痢であつた。
又、入院を勸めて其の日の内に兎に角入院はさせた。
經過が惡くて其の兒は二日後に不幸にも死んで了つた。
其の後、其の家の主人が私の事を、
「彼の醫者は非道い奴だ、死ぬのが解つて居ながら入院させてどうせ子供は死んで了つたのだ。大方病院と結託して居るんだらう。」
と云つて居ると云ふ事を聞いた。

謠曲

專門學校を優秀な成績で卒業して或る銀行に就職した眞面目な青年があつた。母は居るが殆んど晝夜を別かぬ憂鬱症で四六時中口を利く事も無い様な状態であつたので其の父は漸く成人した此の息子一人を樂しみに暮して居た。
此の青年の趣味は謠曲で暇あれば近所の知人の下に通つて敎へを乞ひ其れを唯一の樂しみにして居た。
銀行に勤めて半年で、元より强く無い身體には無理な勤務が禍り病魔に襲はれて床に就いた。父親の心配は一方では無かつたが惡い事に風邪と思つた病勢が惡化して入院しなければならない事になつた。
入院してからの病名が「肺壞疽」であつた。病名と其の豫後を聞かされた父親は流石に驚いたが其の由を不幸な息子に告げ知らせる氣にはどうしてもなれ

なかつた。

自分の病氣は直きに癒ると云ひ聞かされ、自分でもそう信じて居ながら其の青年の病勢は刻々に進行して行つた。

最早絶望と醫者から宣告されてからも一日二日と生死の境をさ迷つて今は食事さへも喉を通らぬ容態であつた。

或る最夜中、此の青年の病室から朗々と謠曲の聲が響き出した。徹宵附き添つて居る其の父がウト／＼とまどろんだ眠りから覺めて驚いて見れば其の聲は正に死せんとする息子の肺肝を衝いて出る聲であつた。此んなに迄衰弱して居る人の何處からほとばしり出ずる聲かと疑ふばかりにシッカリした聲で青年は謠ひ續けて居た。

「げに妄執の雲霧の。げに妄執の雲霧の。迷もよしやうかりける。人を初瀬の山颪。はげしく落ちて露も涙もちり／＼に秋の葉の身も朽ち果てぬ恨めしや。」

耳を澄まして聞けば其れは此の青年の日頃愛誦して居た「玉葛」の最後の一節であつた。既に腦に犯された我が子の謠ふ最後の曲を父親は亂す事無く瞬きもせず其の顏を見守りながら一心に聞き入つて居た。

曲は高くなり低くなり途切れては又續き其の曲に表された文句と同様に節廻しも哀切を極めて居た。

「恨は人をも身をも。恨は人をも身をも。思ひおもはゞ唯身ひとつの。報の罪や、數々のうき名に立ちし懺悔の有様。あるひはわき返り。岩もる水の。思にむせび。あるひは焦るゝや。身より出ずる玉とみるまで包めども。螢に亂れつる。かげもよしなや…………。」

段々に其の聲は弱り細り最後は只口の中で廻らぬ節廻しをつぶやいて居たが其の謠が終ると一緒に此の青年の命の綱もフッツリと事切れて了つたのである。

火傷

街の角々から豆腐屋のラッパの音が日暮方の空に流れ込んで行く或る夕方の事であつた。あわただしく子供を横抱きにして裾もあらわに驅け込んだ患者があつた。其の母の顔は極度の恐怖と驚愕と狼狽に紙の様に眞蒼で碌々口も利かれない程であつた。

其の母親の腕に抱かれてワンワンと火の附いた様に泣いて居る子供が患者であつた。訊いて見ると實際に火が附いたと云ふのである。晩の御惣菜に揚げて居た天ぷらの鍋に臺所に走り込んだ五歳になる此の女の子が引つ掛つて顔から胸に油を冠つて其れに火が附いたと云ふのである。

第二度の火傷で應急の手當をして居る中に餘りの恐ろしさに母親が腦貧血を起して了つた。女の子の事ではあり直ぐに入院をさせた。

一ヶ月の入院の後に全治して歸つては來たものの無殘や其の日の記念が女の子の左の頬に一寸程の蚯蚓腫れの斑痕を形成して了つた。

其の後暫く經つた或る日、餘りおとなしく遊んで居る女の子の樣子に其の母親がソッと覗きに行くと女の子は餘念も無くクレイヨンを取つて自分の人形をどれもこれも左の頬に赤い印しを附けて居た。

「どうして其んな事をするの？」

と母親が訊くと女の子は、

「私のお人形さんですもの。私見たいに赤い印しが無ければおかしいわ。私はお人形さんのお母さんなんですもの。」

無心であるだけに此の可哀な少女の頬に刻まれた不注意のマークと此の言葉と少女の將來とを合せ考へる時に、自ずと湧き出ずる涙を禁じ得ない者は獨り此の少女の母親のみでは無いであらう。

自殺

どうしても自殺を思ひ立つた男が居た。湯屋の息子で貰つたばかりの嫁に逃げられて目茶苦茶に世の中が嫌になつて了つた男である。

往診を頼まれて行つた時にはアダリンを四十錠呑んで昏々と眠つて居た。適宜の處置をして翌日漸く意識を恢復した。安心して歸ると直ぐに又迎ひに來た。今度は揮發油を三〇〇グラム呑んで了つたのである。之れも大抵嘔かして了つたので大した事は無かつた。揮發油の臭ひのする呼氣をプンプンさせて、「耳や目や鼻が馬鹿に滲みらア。」等と云つて案外元氣である。「折角俺が死に懸つて居るのに皆で邪魔ばかりして居やがる。」と云つて居る。

其の翌日又迎ひに來た。今日はどうしたかと思つて行つて見ると短刀で左から右に下腹部を一尺近くも切つて居た。アダリンを嚥んだ後なのと御飯を餘り

食べて居なかのたので力が這入らずに皮膚を淺く切つただけであつた。其の傷も手當をして了つた。するとこんな事を云つた。

「どんな事をしたつて一度はやつて見せるから駄目だ。短刀を取り上げられたつて他に死ぬ事ァ幾らでも出來るんだ。水泳が出來るから水ぢや死ねねえし、鼻を涎らすから首吊りは見つとも無えが、今に先生見ていらつしやい。足がしつかりしたら彼の煙突に乘つて千番に一番の乘合、一氣に飛び下りて見せますぜ。其の時には前以つて先生には御知らせしますよ。」

少々薄氣味が惡かつたので警察に屆けて置いた。其の後飛び下りの無氣味な豫告を貰はない内に男の嫁が歸つて來た。

今では其の男は其の時の事などは忘れて了つて湯殿でセッセと働いて居る。外のどんな事よりも嫁が歸つて來たと云ふ事が其の男には一番藥であつたらしい。

はしか

剃刀の様な冷たい風が街々を吹きすさぶ二月の初めボツボツと麻疹が流行し出した頃であつた。

往診を頼まれた八歳の男子に麻疹の診斷を下して其手當を敎て歸つた。翌日往診したが未だ前驅期の事であるから表面には發疹が表れずに熱だけが高かつた。

二日三日と經つても發疹が未だ出なかつた。初めから風邪と思て居た家人は麻疹と云ふ診斷が餘り思懸けなかつただけに病名に疑ひを持つて居る色が見えた。

四日目にも未だ發疹しなかつた。

「先生、本當にハシカなのでせうか？」

等と遠廻しに誤診を詰る様な口吻である。

「まあ、もう少し待つて御覽なさい。今に出て來ますから。」

家人を宥めながら念入りに診るが確に麻疹である。立派にコプリック氏斑も出て居る。五日目にも心待ちに待つた發疹は出ず徒に熱が高くて患兒はやや衰弱の氣色が見えて來た。

「肺炎になつて了つたんぢやないのですか？先生。」

家人の言葉には醫者が病氣を段々に惡くした様な棘(トゲ)を含んで居た。

明日こそはと意氣込んで往診したが六日目も依然として同じ狀態を續けて居るのを見ると自分自身でも自分で下した診斷に少しく自信を失ひかけて來たのであつた。

其の夜晩く其の家の主人が見えて、どうも麻疹の様には思はれぬから一つ先生のいいと思はれる醫者でいいからもう一人頼んで見て貰ひ度いと云ふ事を云つて來た。今夜は晩いから翌日そう云ふ事にしようと答へて兎も角其の夜は主人を歸した。

其の翌朝の事である。未だ床を離れかねて居た頃、外の扉を叩いて其の家の妻君が見えた。息せき切つて先生に會はせて呉れと云ふ。何事かと思つて會ふといきなり、

「先生、先生の御蔭様で麻疹が出だしまして御座います。今朝早く見附けましたのですが主人も喜んで先生にすぐ御知らせする様にと申しますものですから、未だ先生は御寝みかと思ひましたが待ち切れずに御伺ひ致しました。どうも有難う御座いました。本當に御蔭様で安心しました。」

と喜色満面に溢れて居る。

「昨夜主人が上りまして外の先生を、もう一人御願ひする様に申し上げましたが其れはどうぞ御取り消し下さい。主人も一酷者で御座いますから隨分と失禮な事ばかり申し上げて本當に申し譯け御座いません。何しろ出る迄はイライラして氣が立つて居りましたものですから、どうぞ御氣に障られません様に。

今朝はもう大喜びで早く先生の所へ伺つて御知らせ旁々よく御詫びして來る様にとの事で御座いましたから早朝から御騒がせ致しまして相濟みません。」

其の日往診すると成る程美事に發疹して居た。

「此れで此の子も漸く一人前になれました。」

と家の人は赤の御飯でも焚きそうな勢である。發疹が出て見ると家人は其れを醫者が出させた様に感謝するが醫者の身になつて見れば病氣の方に餘程感謝し度い位である。思へば一週間も氣を揉ませた加答兒期の長い麻疹の一例である。

其の後は順調に經過して直きに起牀する事が出來た。すると實際に其の家から床上げの印しだと云つて赤飯を届けて呉れた。自分は其の赤飯を微苦笑を洩らしながら食べた事である。

拔け毛

頭髮が自然に拔け落ちて困るからと云つて私を訪ねた人が居た。

患者は知人の妻君で此の四月に結婚して未だ七ヶ月にしかならない。部分的に禿髮症を起す程度では無く自然に拔け落ちて毛髮が段々薄くなつて來たので心細くて仕方がないから診て呉れと云ふのである。最近、汎發性毛髮脫落を招來する樣な熱性傳染病を經過した既往症も無い。原因が解らぬので×××病院の皮膚科に紹介狀を持たして遣つた。

病院では黴毒性禿髮症であらうと云ふので血液を檢査する事になつた。

翌々日出頭するとよもやと疑つて居たワッセルマン反應が强陽性と云ふ結果であつた。立派な黴毒であるからサルヴルサンの注射をしなければいけないと云ふ事になつた。兎も角其の日の中に一本して貰つて歸つたが其の後が大變な

事になつて了つた。

歸つて來た妻君が夫に向つて、

「妾は今日位辱づかしい思ひをした事はありません、生れてから黴毒だなどと云ふ言葉は非常に汚らはしくて自分達とは違つた人種の人達にしか無い物と思つて居たのに其れが今日はハッキリと自分にあると宣告されて了つたのです。此れは吃度貴郎が妾に傳染させた物に違ひありません。貴郎は結婚前には品行方正であると妾や妾の父母や仲人を欺して妾と結婚したのです。貴郎は非道い人です。貴郎がそんな信用の出來ない人とは今迄妾は知りませんでした。今迄欺されて居たと思ふと妾は口惜しくてたまりません。」

と夫君攻擊の第一彈を放つたものである。すると家でどんな結果かと心配しながら妻君の歸りを神妙に待つて居た夫君はイキナリ思ひ懸けぬ罵詈を浴せられたので性來の短氣も手傳つてツイ荒い言葉で應酬した。

其の結果が妻君は其の夕方泣きながら實家に歸つて行つて了つた。後に哀れなのは其の男で夕飯を拔かれて空腹を抱へて私の所へやつて來た。
「實際にそんな惡い遊びをした覺えがありますか？」
と訊いて見ると、「無い。」と云ふ。
「それならば其の由を妻君によく說明してやつたらいゝでせう。」と云ふと、
「自分もツイカッとして了つたものだから。」と當人大分ショゲて居る。
其の翌々日の夜、又其の男がブラリとやつて來た。大分弱つて居るらしい樣子では未だ妻君が歸つて來ない樣に思はれる。
「どうしました？」と訊くと、
「弱つた事が出來て了つたんです。」と云ふ。
よく訊いて見ると妻君の實家では妻君の父母共大分立腹で、「娘にそんな病氣のある筈は無い。其れは確に結婚後感染した物に違ひ無い。どうも仲人の話

を信用して娘をやつたのに非道い男だ。娘の云ふ事は皆尤もだ。一體此の不始末をどうする積りだ。」と正式に男の親元に人を寄越して申し込んだと云ふ事である、男は實際に弱つて居るらしい。
「ではこう云ふ事にしたらどうでせう。君の血液を取つて檢査して上げますから。其の中に毒の無い事が解れば向ふだつて納得するでせう。」
こう私が云つてやると、
「えゝ。」と甚だ煮え切らぬ返事である。
「其れが一番いゝ方法です。併し君には全く惡い事をした覺えは無いのでせうね。」と念を押すと、
「えゝ。」と矢張り煮え切らぬ返事をする。
外のいゝ智慧も無いので兎に角、血液を採取した。男はやはり弱り切つた樣子で歸つて行つた。

翌朝其の男から電話が掛つて來た。
「何ですか？」と云ふと、
「血液検査と云ふ物は其んなに正確な物ですか？」
「其れは或る程度迄は充分信用の出來る物です。」
「前に知らず知らずに。例へばお湯屋等で感染したとしても反應は陽性に出る事がありますか？」
「お湯屋で感染するなんて事は未ずあり得ないが以前に感染したとしても血液中にスピロヘータが居る限り陽性に出ると見て間違ひは無いですね。」
「ズッと古い頃に感染してもですね。」
「そうです。」
と返事をすると此處で言葉が途切れて大分考へ込んで居るらしい。
「實は云はうとして云ひそびれて了つたのですが三年程以前に一度友達に招

はれて惡い所に行つた事があるんですが。」
チョット今度は此方が返答に困つて了つた。
「其の後、君の身體に異狀は起らなかつたですか？」
「別に何ともなかつたのです。尤も充分に消毒して置いた積りですが？」
「それなら大抵大丈夫でせう。併しそう云ふ事があれば猶更血液検査の必要はあつたわけですね。」と云ふと、
「どうも相濟みません。」と眞面目で謝つて居る。顔は見えないが畏つて赫くなつて居る樣子が目に見える樣だ。
皮肉な事に血液検査の結果は陰性であつた。其の結果を其の次に來た時、其の男に話すと電話の時の悄げ方は何處へやら急に元氣が出を來て、
「彼奴、自分の黴毒を棚に上げて此方ばかりを惡者にして却つて此方が傳染させられる所であつた。彼奴だつて大きな事を云つたつてどんな身體だか知れた

ものぢやない。私も今度の事で親の前にも面白くなくてクサクサして居たのです。一つ陰性の證明書を書いて下さい。其れを親にも見せて安心させてやりますから。」と云ふ。證明書を書いて渡す時に、

「成る可くこんな事は荒立てゝはいけないから、おだやかに話してフラウも、早く返す様にするんですね。」と云つた。私には其の男が妻君を嫌つては居ない事がよく解つて居たからである。

「有難う御座います。」と云つて歸つて行つた。

事件は其れだけでは濟まなかつた。惡い時には仕方の無いもので平常大人しい男の父親が其の證明書を見て怒つて了つた。

「人を馬鹿にして居る。此方の息子ばかりに科を被せて自分の娘の身體に毒のあるのを知らないのだ。此方こそ大迷惑な話だ。自分の娘ばかり立派な娘だと思つて其んな身體では疵物か何か知れたものではない。」

と云ふのである。餘程口惜しかつたと見えて男の父親は其の證明書を持つて嫁の實家に捻ぢ込んで行つた。

事件が段々に大きくなつて行つて遂々仲人迄出て來た結果が、此れは嫁の父母に黴毒があつて娘に遺傳した先天性黴毒では無いかと云ふ憶測迄惹き起して今度は嫁の父親が先ず血液を檢査される事になつた。所が其の父親たるや謹嚴其の物の樣な人格者と云はれて居た人であるが、血液檢査に先立つて大分其の妻君に舊惡を攻められたと見えて、實は自分も一度黴毒になつたが併し今では充分に六〇六號の注射をしたからスッカリ癒つて居ると云ふ事を白狀して了つた。其の爲めに今度は若夫婦のみならず嫁の父母の間にも紛爭が起つて事件はいやが上にも複雜を極め混戰の狀態となつて了つた。

或る夜仲人が家に來て此れも前から幾らか知つて居る間柄でもあつたので、

「どうしたものでせう？何か御名案でもありませんでせうか？」

と云ふ。患者を診て治療する以外に能の無い醫者に名案のあらう筈も無く增して自分に此の紛爭を極めた家庭爭議の解決が出來そうにも思はれない。
「一度、伊佐男さん(息子の名)を寄越して呉れませんか?」
仲人が歸る時に言傳てを頼んだ。
　直ぐに來るかと思つて居るのに其の後仲々男は來ずに暫く立つてからブラりとやつて來た。
「どうも彼方も此方も敷居が高くなつて了つて伺ひ難くつて困りました。」
と云つて居る。
「其の後、彼の問題はどうしました?」
「どうもこうもありません。今では親同志の方で喧嘩をして居て此方はソッチノケの形です。」
「奥さんから何とも言つて來ませんか?」

「實は其の事なんですが、昨日妻からの手紙で謝つて來て居るのです。」
「お父さんにですか?」
「いや私にです。」
「ハハー。」
「つまり彼の節は興奮して失禮な事ばかり申し上げて申し譯けが無い。貴郎の陰性と云ふ血液檢査の結果を聞いて今更貴郎に合せる顏も無い。却つて今では自分の親達を恨んで居る。貴郎は私の歸るのを許して下さるかしら。貴郎が許して下さつても今となつては貴郎の御兩親が承知しないでせう。と云ふ樣な事が書いてあるのです。」
「成る程。」
　色々と協議をした結果、双方の親達には秘密で若夫婦同志でもう一度違ふ病院で診察を受け同じ診斷であれば更にサルヴルサン注射だけは進めなければな

るまいと相談した。男が家を出て行つた妻に充分未練があり早く歸つて來る事を願つて居る事は其の話振りでも充分に察せられるし、出て行つた妻君の方でも決して男を嫌つて居るのでは無い事は其の手紙の內容でもハッキリと讀めるので頑固な親達を和解させるよりも先に出し拔く樣ではあるが元々仲の良かつた若い二人を接近させて親達の仲直りをさせるに限ると考へたのであつた。

よくしたもので此の相談が纏つて男から其の妻君に手紙を出させると呆れる程早く妻君が私の家にやつて來た。未だ男の家に歸るわけには行かないので私の家で日と時間を決めて男と落ち合ふ約束にさせたのである。約束の時間より男もズッと早くイソ〳〵としてやつて來た。二人とも喧嘩した事など忘れ果てた樣に嬉しそうで却つて此方がテレる位の睦しさである。話しの樣子では喧嘩して以來初めて今日會ふのでは無い樣にも思はれる。或ひは若い二人同志でトックに仲直りして此方を出し拔いて時々會つて居るのかも知れない。

今度は芝の△△病院に紹介狀を持たせて其れに私の同級であつた男に大體の今迄の經緯を簡單に記してどうぞ部長によく診て貰ふ樣にと附け加へて置いた。

三日後に男が又私を訪ねて意外そうにこう云ふのである。

「△△病院でもよく診て戴きましたが矢張り一度血液を檢査する必要があると云ふので彼の日、アレの血液だけ採りましたが今日行つて見るとワッセルマン反應は全く陰性であるからサルブルサンの注射は必要が無いと云はれましたが其んなに急に反應は出たり引つ込んだりするものでせうか？それ共×××病院でして貰つた注射が一本で癒つて了つたのでせうか？」

「へー、それは結構な事だ。一度私の方から病院にどんな容子だかよく訊いて置いて上げませう。」

男は陰性と云ふ證明書も持つて居て私に見せたが私にはチョッと譯が解らな

かつた。或ひは私の手紙で氣を利かして陰性と云ふ證明書を渡したのかと疑つても見たが其んな筈もあり相も無い、男は喜んで歸つて行つた。

翌日病院に電話を掛けて受持の醫者を呼んで貰つて訊いて見ると嘘ではなく實際にワッセルマン反應も念の爲めにした村田氏反應も兩方陰性と云ふ事である。今度は益々此方の方が解らなくなつて了つた。

兎に角陰性ならば此んな結構な事は無いので仲人と男の親とに、此の事をスッカリ話して又二人を元の樣に一緒にしてやる樣に相談をした。

元來が毒があるから起つた騷動なので毒が無いと極れば問題のあらう筈は無い。若い二人の仲が好いので双方の親達も可愛いゝ子供達の爲めに割合にサッパリと和解して一週間後に電話を掛けた時には「もう昨日から歸つて居ます。」と云ふ若夫人の朗らかな返事であつた。

二三日經つと若い二人が揃つて私の所に禮にやつて來た。色々御骨折を願ひ

ましたが何日に仲直りの宴會をするから先生にも是非出席して戴き度いと云ふ。

生憎其の日は外に出席しなければならない用事の爲めに私は出る事は出來なかつたが、此れでさしも紛爭を極めた拔毛騷動も目出度く解決したわけである。其れにしても謹嚴であつた女の父や男の舊惡が飛んだ所で暴露したりして何處迄も罪な拔毛ではあつた。

其の後男に會つた時、妻君の拔毛を訊ねると多少拔ける事は拔けるが其れと云つて坊主になる程目立つて拔けもせず、今では自分も本人も氣には止めては居ないと云ふ返事であつた。

今では可愛いゝ女の子が出來て相變らず睦しい樣である。

猫

次の話は自分の經驗した事實では無い。私の友人の産婦人科の開業醫に聞いた話であるから眞僞の程は保證し難い。然も此の話をして吳れた友人は病ひを得て鄕里に歸り程無く夭逝して了つたので今は問ひ合せて確めるよすがも無くなつて了つた。

其の醫者は非常な猫嫌ひの男であつた。何處が嫌で何處が怖ろしいと云ふ事も無く絕對的に猫を見ると震へ上る程、生れつき嫌ひなのである。友人の我々が聞くとチヨツト可笑しい樣に思はれるが大抵の婦人が長虫や毛虫の話をしても首を縮めて嫌がると同じ樣に其の男も猫と聞くと顏を顰めて逃げ出すのである。であるから猫に對しては恐ろしく敏感であつた。一緒に歩いて居る時に突然其の男が蒼白な顏をして立ち止る時には近所の垣の向ふをチラリと掠めて通

る猫の影があつた。談話の最中でも其の男が突然默つて固くなる時には屋根の上をミシリと通る猫の足音が微に聞えた。夜中などに闇の中から友を呼ぶ猫の鳴聲等を聞いた時には其の男は耳を掩ふて窓を閉め小さくなつて了ふのであつた。

或る冬の夜の事であつた。

風邪氣味で早く寢た此の男が惡夢に魘されて目が覺めたのは眞夜中の頃であつた。目が覺めるや否や男は今見た夢を考へた。

餘程大きな猫と向き會つて座つて居る夢であつた。大きな白い猫で、其の猫が男の顔を見て笑つてゐるのである。ゾッとする程凄い顔で、逃げ樣としても動く事が出來ないのである。然も猫も向つて來るのでも無く逃げるのでもなくジッと蹲つて男の顔を只見守つて居るのである。

男は目が覺めた時、グッショリと寢汗をかいて居た。氣に掛る事には今の夢

ばかりで無く今、目が覺めたのは夢の怖しさでは無くて誰か外に自分を起しに來て居る様な氣が職業的の敏感さで感じられて居たのである。

耳を澄まして聞くと、

「今晩は、……今晩は。」

と云ふ聲が玄關口から微に聞えて來る。書生か看護婦か誰か今に起きるであらうと思つて待つて居たが晝の疲れで誰も起きて行く者も無い。

「今晩は、……今晩は。」

と云ふ聲は未だ聞える。呼鈴を押しでもしなければ到底誰も起きそうも無いのに玄關の聲は途切れ途切れに未だ聞えて來る。其の儘、放つて置いて寢て了ふわけにも行かず寢て居る者を起して出すのも少しく氣の毒の様な氣がしたので其の男は立ち上つてナイトガウンを引つ掛けて玄關の覗き窓を開けて見た。

「何方さんですか？」

外には絆纒を着た脊の低い男が立つて右手に古風な提灯を下げて居た。今時現代離れのした提灯ではあつたが其の場の空氣にチツとも不調和には思はれなかつた。チョツト大工か職人の様に思はれる此の小男は頭を短い角刈りにして提灯の暗い火影に照し出された黄色い顏はクシャクシャと角張つて實際の年齢よりはズット老けて居るのでは無いかと思はれた。

「往診して戴き度いのですが。」

其の男は下を向いて低い聲で呟く様に云つた。

「ごう云う患者さんですか。」

「家内なんですが、難產で苦しんで居るものですから。」

「御近くですか？」

「直ぐ其處の××町●番地です。」

「御名前は？」

「△△と申します。」
××町〇番地と云へば良く知つて居る邸街であるが△△等と云ふ家はチットも知らなかつた。其れに××町〇番地は大きな邸ばかりで此處に居る男の様な人が住んで居る場所では無い。
「〇番地はどの邊ですか？」
「四ッ角を右に曲つて榎の木の立つて居る所を左に廻つて一番の奥の突き當りですが。」
其れも良く知つて居る場所である。
「そうですか。兎に角伺ひませう。△△さんですね。」
「ハア。電燈をつけて置きますから、直ぐ解ります。ではどうぞ。」
男は一つ御辭儀して提灯を下げて闇の中に消えて行つて了つた。
其の時聞いた△△と云ふ名前は其の時にはハッキリと覺えて居たのに今とな

つては口元まで出かゝつてどうしても思ひ出せないのも不思議である。
寒くない様な支度をして往診鞄の支度をして外に出て見ると冬の夜中ではあつたが非常に生暖くて空は黒く星一つ見えない夜であつた。
車夫は歸した後なので一人で歩いて行くと自分の足音がコツンコツンと物寂しく夜の闇の中に消えて行つた。馴れた道であるので自然に足が四ッ角を右に曲つて榎の木の下迄行つた。
暗い夜だつたので一本だけ空に高く聳え立つた榎が脊の高い眞黒い怪物の様に無氣味に見えた。
其の榎の木に沿つて云はれた通り左に廻つた。廣い邸街の殊に眞夜中はヒッソリカンと靜まり返つて兩側の長いコンクリートの塀が氷つた様に白く浮き出して見えた。暫く行つたが兩側はコンクリート塀ばかりで右側に小さな潜り戸があるきりで見通しの利く行手は矢張りコンクリート塀の袋路で行き詰りであ

る。試みに右側の潜り戸の所迄戻つて其の扉を押して見たがビクとも動きはしなかつた。

何處にも入口が無いので當惑して暫くは人の無い邸街の眞中に其の男は立ち盡して居た。が其の時に不圖男は先刻の小男が最後に云つた言葉を思ひ出した。

「電燈をつけて置きますから直ぐ解ります。」

男はグルリと周圍を見廻すと其の道の突き當りにたつた一つ塀の上に頭を出した街燈が黄色く淡く瞬いて居るだけであつた。外に電燈が見える所が無かつたので其の男は其の街燈の側迄行つて見る氣になつた。

街燈の側に行つて見ても突き當りは矢張り塀で入口は無かつた。塀の下に大きなコンクリートの塵芥箱があつた。其の塵芥箱の横に蠢いて居る物があつた。淡い街燈を便りに闇に馴れた目を据えて動く物を見ると其れは大きな白い猫で三四の仔猫を生んで猶一匹の猫を生まうとして血だらけの努力を續けて居

る所であつた。

男はギヨツとして棒の様に固く立つた。白い猫は苦しい努力の中から男の顔をジツと見上げた。其の怪しく輝いた目には男に害をされるのでは無いかと疑つて居る恐怖と難産の救ひを求める苦痛とが織り混ぜられて居る様であつた。

どう云ふ風に歸つたのか男は少も思ひ出せなかつた。只氣が付いて見た時には自分の寢床の上に息も絶え絶えになつて倒れて居た。其の右手は何時どうして付いたものか解らぬが赤黒い凝血がこびりついて居た。

其の夜から高い熱が出て男はドツと床に就いた。二日程意識が溷濁して恢復も怪しまれる重態に陷つた。其の間に男は猫の顏を見たり猫と話す夢を見たりして、しきりに譫言を云つた。

幸に一週間程で快方に向つたが床を離れる頃には都會の生活には其の神經が耐えられなくなつて、身體の調子が恢復すると、郷里に歸つて行つて了つた。

聾

郊外に開業して相當忙しい小兒科の醫者が居た。或る時、急性化膿性中耳炎を病んで全快した時には患側の耳は殆んど用を爲さない位遠くなつて了つた。健康側の耳も小さい時に鼓膜に損傷を起して聽力は非常に減退して居たので、病後は家人も餘程大きな聲を出さ無いと聞え無いのである。

性來が暢氣な性質であるので此の爲めに悄げ返る樣な事も無かつた。其れに親切で開業術が上手な醫者なので患者が相變らず澤山に來た。既往症は馴れた看護婦が傍に居て醫者の問ひに答へる母親の言葉を其の儘カルテに書き込むのである。醫者は自分の訊き度い事だけは訊くが別に其の答へを聞かなくともいゝ。傍で書く看護婦のカルテを見ながら診察を進めて行くのである。

視診と觸診は差し支へは無いが、聽診は困るであらうと思ふと先生は一向に

慌てずに、丁寧に聽診器を耳に當てゝ聽いて居るのである。

或る時、彼を訪問した醫者が聽診の樣子を傍で見て居り餘りに本當らしいので患者達の歸つて了つた後で大きな聲で聞いて見た。

「君は聞えるのかい?」

「大きな聲は聞えるさ。」

「聽診は聞えるのかい?」すると其の醫者は平然として答えたのである。

「いや、全く聞えない。」友達の醫者は呆れて云つた。

「でも隨分丁寧に診てるぢや無いか?」

「あゝしないと具合が惡いからさ。 聽診器を當てなければ患者の方も納得しないし、自分も診察の順序として見て居るだけで別に聽いて居るわけでは無いのだが、あれをしないと變だからさ。」

其の醫者は今でも仲々忙しいそうである。

復讐

剛慾な婆さんが居た。

お話しにならない様な貧しい棟割長屋の一番奥に住つて居た。爺さんの生きて居る頃は傘屋をして居たが爺さんが死ぬと同時に生前爺さんにも内密で溜めた臍繰金で長屋の者に小金を借して生活して居た。

小金であるのに高利を取つて利息を入れなければ火鉢でも下駄でも手當り次第持つて歸るので長屋の評判は恐ろしく惡かつた。其の上約束の期日が來れば留守でも何でも上り込んで布團や鍋、釜の類迄取り上げられる人もあつた。

其んな風であるのに横着と貧困の爲め、長屋の連中はよく此の婆さんから金を借り、借りては酷い目に會はされ、會はされながら又よく借りた。であるから婆さんの商賣は仲々繁昌した。

或る夏の始めに此の婆さんが病氣になつた。日頃酷い目に會はされてばかり居たので此んな時にも長屋の連中は誰れも見舞に行く者が無かつた。ウツカリ行つたら借金の催促をされるかも解らなかつた。中にはいい氣味だと云ふ者もあつた。

婆さんの家の前を通るとゲーゲーと何か嘔いて居る音がしたのを聞いたと云ふ者があつた。何でも餘程重いらしく彼の強情な婆さんがウンウン呻つて居るのが聞えると壁一重隣りの女が云つた。

此の長屋の奥に一つの井戸があつた。或る朝非常に早く此の井戸に水を汲みに行つた長屋の女房が釣瓶に手を掛けて倒れて居る人を發見した。其れが金貸婆さんの最後であつた。傍にエナメルの剝げた藥罐が轉がつて居た。餘程咽喉が乾いたと見えて病ひを押して井戸の水を汲みに出かけたのであつた。誰れも汲みに行て呉れる者も無し頼むには餘りに強情過ぎた婆さんの最後であつた。

死んで了へば怨も仇も無い。長屋の連中は寄り合つてお通夜をした。

「恨めしさうな顔をして歯を食ひ縛つて空を睨んでた顔を見たら妾ャ、ゾッとしたよ。」

と初めて婆さんの死骸を發見した女房が小さい聲で囁いた。

「醫者にも掛らず、誰も見舞にも行つてやらなかつたんだから、婆さんも口惜しかつただらうよ。」

と答へた者があつた。其れは婆さんに一番借金して居た男でドサクサ紛れに借金を拂はずに濟んだのを喜んで居た。

初七日が濟んで二三日經つと此の長屋にバタバタと病氣が流行し出した。

最初に罹つたのは婆さんに一番借金をして居た男で病氣は腸チフスであつた。

其の次に婆さんの隣りの女房が發病し、更に翌日婆さんの死體を眞先に發見した女が寢込んで了つた。

病氣は孰れも腸チフスで中には可成り重症の者もあつた。引き續いて八名の患者が續出して其の内二名は死んで了つた。重いのが大抵は婆さんの借金を踏み倒した連中なので無智な長屋の人々は婆さんの祟りだらうと怖氣を震つて恐ろしがつた。

長屋の奥の井戸はクロール石灰を投入し、蓋を釘付けにして使用を禁止された。思ふに婆さんの死因は腸チフスで其の死後、此の様な蔓延を惹起したものらしく思はれる。

投　書

或る朝、一通の端書を受け取つた。差出人の名前も日附も無く宛名の醫院の名も呼捨てである。文面を見ると、

「當院の醫療費請求書に水藥、散藥、注射と總べて一つ宛の明細書の無いのは不都合である。往診料が家に依つて違ふのは不都合である。藥價が子供で小さい壜であるのに普通に取るのは不都合である。

自分の店の外にも不都合であると云つて居る家がある。此の次から改めて貰はなければ不都合である。」と下手な字で書いてあつた。端書の表に一つと裏に二つ不注意で汚した黑い指の跡があつた。其れは炭で附いた汚點で仔細に見ると表の一つは大きくて指を當てて見ると左の拇指に相當する指紋である。裏の二つは表のより小さいが自分の指に比較すると大分大きい人差指と中指に相當

する指紋であつた。

此の端書で見ると、此れを出した人は第一に男で指の大きい所から見て勞働をする。炭類を扱つて居る。知らず知らずの中に文面に表れた「自分の店」と云ふ所から見ると商賣屋であつて然も字の形を見ると高等教育を受けたとは思はれ無い。文句を云ふ癖に面と向つては云ひ切れ無い男で「不都合」を連發する癖を考へて見たら、居た。居た。角の炭屋の親爺の狡猾そうな痩せた顔が目に浮んだ。

其の後、炭屋の前を通ると日の當る所で親爺が眞黑な手をして丸いタドンを並べて乾して居た。

「仲々寒いね。」と挨拶すると、

「今年は何時迄もこんなに寒いと云ふのは不都合ですよ。」と云つた。

「風邪が大分流行つて困るね。」

「全く弱つたね、家中風邪つ引きで寢て居るんだから、こんな不都合な事ァ無え。」
「併し寒けれは炭は賣れるから都合が好さそうなものぢやないか？」
「冗談ぢや無え。炭の値は安いし炭屋は續々殖えるし不都合な話しだ。」
「そんなものかなァ。」
「其處へ行くと先生なざァ病人が殖ぇりや其れだけ儲かるつてんだから全く以つて不都合だ。」と盛に「不都合」を連發する。此の男と話しをすると世の中の事は大抵「不都合」になつて了ふ。
「此の間は端書を有難う。今度から成るべく不都合の無い様にしよう。」
と何氣無く云ふと親爺がチョット度膽を抜かれた形で目を白黒させた。
「イエ、ナニ、ソノ、どう致しまして。」
と妙な挨拶をして店の中に引つ込んで了つた。

占ひ

自分の郷里で起つた出來事である。
土地の占ひ者に運勢を見て貰つた所が此處數年中に胸を痛めて死ぬ事があるかも知れない。注意をなさい。と云はれた若者が病院に來て健康診斷を受けた。大きな醬油屋の息子で二十一になるが店の若い衆と一緒に働いて居るので胸等も鐵板を叩きつけた様に固く緊つた筋肉は診察をせずとも胸に病氣等のあらう様には思はれなかつた。猶念の爲めにレントゲンで診察を受けたが勿論何の變化も認められはしなかつた。醫者達は賣占者の言葉を一笑に附し若者は安心して歸つて行つた。其の後三年程經つて其の若者の事も忘れ果てて居た頃、突然其の若者の死を聞いた。
若者の家は丁度街の眞中を縱斷する坂の途中にあつて昔風の大きな門は流石

に近頃の安建築とは違つてドツシリと立派であつた。其の門の横に小さな潜り戸があつて平常は此の扉は孰れも閉ざされて居た。造り醬油屋の事とて平常は表門を開いて置く必要が無かつたのである。横の潜り戸だけは外から押せば自然に内側に開く樣になつて居た。若者は毎日、自轉車で近所の註文を取つて歩いた。店の小僧達と一緒によく働いた。

「醬油屋の息子は働き者だ。當り息子だ。」と近所の人達にも噂された。若者は註文を濟ますと坂の上から自轉車を飛ばして家に歸つて來た。勢の付いた自轉車をドン！と潜り戸に打ちつけると扉が自然にパッと内側に開いた。若者は自轉車に乘つた儘門の内に走り込むのであつた。其れを毎日の習慣の樣に繰り返して居た其れが若者には非常に冒險的で愉快に感ぜられて居た。

或る日、若者は坂の上から勢良く走つて下りて來た。家の前で左に廻りながら潜り戸に自轉車の前輪を打つつけた。扉は併し、固く閉つた儘で何時もの樣に

開かなかつた。若者は自轉車と一緒に跳ね返つて地面に叩き付けられた。自轉車の車輪がグニャグニャに曲つて了つた。若者の胸にハンドルの一端が突入して肋骨が二枚折れた。誰が閉めたのか其の日、潜り戸には内側から鍵が掛つて居たのであつた。

若者は擔架に載せられて縣立病院に送り込まれたが外傷が大きかつたのと出血が多量であつた爲めに翌日死んで了つた。

「今にして考へれば胸を氣を付けよと云はれ候は此の事にて候、我も息子も肺病のみと思ひ定め其の方のみ氣を付けしは手脫りにて候、今となりては何事も愚痴とは思へ共、怪我で死ぬとはよも思ひ測られず候ひき。」

自分の出した悔みの手紙の返事に、若者の父がこう云つて寄こした。働き手のいい息子を突然失つて了つた父親の寂しそうな姿を思ふと何とも氣の毒で顏を合せる氣にはなれない。

喘　息

正月の三日と云ふと定つて喘息を起す患者が居た。

如何に身體の具合がよく天候がよくとも正月の三日になれば印で押した樣に喘息を起すのである。職業は靴屋で年齢は五十三であるが此の習慣は六年前の正月から起つて以來恒例となつて了つた。

病氣は氣管枝喘息で此の發作が起ると約束の仕事も何も放り出して苦しみ出すのである。額に冷汗を流して鼻汁を垂らして呼吸困難の爲めに寢る事が出來ずに机に寄り掛つて苦悶して居るのである。

正月以外にも曇つた濕氣の多い、それで居て少し寒い樣な天候の時には時々起るが其れは不定で一年の内起らぬ事もあり二三度起る事もあるが正月の三日と來たら此れは實に正確に起るのであるであるから患者も二三年後には馴れて

了つて三日になると仕事も一先づ片付け屠蘇を飲み餅も小量食べ其れから床を延べて落ち付いて喘息を起す樣になつた。餅はどうして小量を食べるかと云ふと喘息が起るとどうせ嘔くから澤山食べると損なのである。

或る正月などは患者も妻君もウツカリと此の喘息を忘れて居て三日の夜になつた。妻君が何の氣無しに、

「三日も此れで無事に濟んだね。」

と云つた途端に主人が喘息を思ひ出して發作を起し出した事があつた。

其の度に自分が呼ばれて注射をした。二筒位で大抵の時は納まるが時には二晝夜も發作が連續して起つて六筒も注射した事もあつた。

自分の方も仕舞には此れを覺へて了つて正月の三日は朝から喘息の注射の道具を揃へて待つて居てやる樣になつた。

正月の三日だからと云つて喘息の起らなければならない理由は何處にも無い

のだからと如何に患者に說明してやつても患者は仲々頑固で必ず起るものだと深く信じて了つて居るので容易に自分の說明を領こうとはしない。そして相變らず正月の忙しい御目出度い休み度い時に毎年喘息を起して居たのである。

或る年の正月、一年間の骨休みに二日の夜から三日に掛けて自分は溫泉に避寒に出掛けて了つた。靴屋の喘息の事を全くウツカリと忘れて居たのである。

三日も遲れて四日の朝歸つて見ると留守の內に大分患者が溜つて居た。急な人は勿論他の醫者に行く樣に其の醫者の名もよく敎へて出たので安心はして居たものの留守に來た患者の中に例の靴屋の名があつたので自分はハツと思ひ出した。正月三日と靴屋の喘息を離して考へる事は出來ない筈である。自分の留守中さぞ困つた事であらう。どうしたか知ら。別の醫者で快くなつたかしらと色々心配した。

其の日は心配しながら澤山の用事も溜つて居たので其の儘であつたが其の翌

日の五日に靴屋の近所迄往診があつたので通り掛りに店を覗いて見ると主人が仕事場で仕事をして居た。案外元氣な顏付きで咽喉がヒユーヒユー鳴つて居る樣な事も無い。此れはいい按配だと思つて外から聲を掛けて見た。

「一昨日は出て了つて大變失禮した。留守で隨分困つただらうが喘息はどんな具合だつたね？」

「ア、先生ですか？一昨日は實際弱りました。先生が御留守だもんで。」

「全く氣の毒をして了つた。ついウツカリ忘れて了つて。併し具合のよさそうな顏をして居るぢやないか？」

「へえ、私は御蔭樣でよくなりましたがね。」

「外に惡い人でも出來たかね。」

「いや實アね。三日の午頃例の通り私がソロソロ惡くなり出しましてね。先生の所に鼻を出しますと生憎御留守で御歸りが今晩遲くか明朝だてんで。とても

其れ迄は待ち切れまいと思つて先生の御宅で敎つた御醫者に又喘をやりますと此處が又往診が遠くて御歸りが遲いてんで。其の内に喘息が段々强くなつて來るんで心弱くなつてお隣りに時々來る先生を聞いて其の先生に來て戴きましたのサ。するとね其の先生はもう餘程の御年齢でしたが私の喘息を診察して居る内に御自分も喘息だと見えましてね。段々息が苦しくなつて咽頭が鳴り出す。苦しみ出す。其れが私のより見て居るとズッと苦しそうに見えますのサ。御年齢は取つて居るし苦しみ方も强いので喘が看病して居る内に私が手を延ばし起き上り一緒に世話を燒いて上げてる中に未だ注射もして貰はねえのに自分の喘息を忘れて了ひましてね。漸く少し其の先生が落ち付いたので車に載せて歸つて戴きましたがね。氣が張るつてものは恐ろしいものでサ。お蔭で自分の喘息がスッカリ何處へか飛んでつて了つて昨日は普通に起きて仕事をして見ましたが何でも無え。今日もこうして起きてますがね。もう起ら無い樣ですよ。」

と云ふ返事であつた。

其の翌年の正月三日には靴屋の家からは迎ひは來なかつた。其の又翌年と今年で三年になるが靴屋はあれ以來發作が起らぬと見えて何んとも云つては來ない。

變　死

相州鎌倉に住む六十四歳になる老婆で人相をよく見る人があつた。別に看板を上げて商賣にして居るわけでは無いが其の云ふ所がよく當ると云ふので傳手を求めて相を見て貰ふ人が非常に多かつた。

此の老婆は毎朝顔を洗ふと鏡の前に座つて先ず自分の相を見てから一日の仕事に取り掛る事にして居た。或る朝例の如く鏡の前に座つてジッと自分の顔を見ると驚くべし、自分の顔にアリアリと變死の相が表れて居た。

老婆は併し慌てなかつた。常日頃自分が人相を見る爲めにかかる相を自ら發見した事を感謝した。外に出て思ひがけぬ所と時に醜骸を曝して世に恥を殘さすに濟んだ事を喜んだ。人相を見て貰ひに來る總べての人を斷つて家の中をキチンと整理して後事に心殘りの無い樣に取り片付け、遺書も書き、總べての事

をし終つた後に自宅の裏庭にある井戸の中に這入つて變死して了つた。

此の人相見の老婆が變死したのは老婆の顔に變死の相が表れたからでは無く變死する運命であつたから變死の相が表れたので最後迄此の老婆の人相見が確實に適中し然も死んで迄自分の職業に自信を持つて居り自分の觀相に忠實であつたと云ふ事は其の遺書で解つた事である。

豫防注射

チフスの蔓延し初める初夏の事、例年行はれるチフス豫防注射が初まつたので若い醫員のL君は大多忙を極めて居た。

L君は××病院醫局に勤めて居る若い醫員であるが毎年チフスの豫防注射が初まると五〇〇人以上の注射を行ふのであつた。醫院に來る豫防注射は大抵は若い人に廻されるので其れを殆んどL君が受持つてして居た。其れから病院に勤務する人達の注射も全部させられた。看護婦達のも全部した。其れから大商店の店員達の豫防注射とか青年團の豫防注射とか何十人かの大口の注射がチョクチョクあつた。

其の外に町會の豫防注射があつて其れには交替で病醫院から一人宛醫員が呼び出される事になつて居たので其れにもよくL君は出掛けて行つた。町會の豫

防注射となると數も大變多く大抵は一人で百人以上の擔當になるのであつた。L君は其れらの人々に丁度大根に針を刺す樣に年齡に相當する量を無神經に無頓着にブスブスと注射して行つた。一々氣を使つてやつては居られなかつた。右手が疲れて筋肉が强直し思ふ樣に動かなくなつて手を休めて揉む時も度々あつた。注射が終るとL君はヘトヘトに疲れて病院に歸つた。

又或る時は小學校に呼ばれて行く事もあつた。小學生に豫防注射をする爲めである。小學校に行く時も大抵の場合一〇〇人以上は受け持つのである。又或る時は區役所の二階で町の人達に注射を行ふ事もあつた。

此の時には注射を受けに來る人が大抵大人である上に人數が非常に多いので大變骨が折れた此の時には二〇〇人以上も注射する事もあつた。

此れらの注射の外に遠い場所から注射醫の招聘があるとL君は進んで出掛け行てつた。其れは其う云ふ招聘があるのは大抵夜六時から十時迄の間で此の時

間は病院の仕事も濟んで自分の身體に都合が付くのと、餘り多くの注射をするので注射の練習にもなる上に注射其自身にL君は此頃興味を持ち初めて居たためでもある。更にもう一つ忘れてはならない重大な事は豫防注射を終ると必ず相當な額の手當を貰へる事で、L君の樣に病院に寢泊りして居る若い醫員に取つては此の不時の收入は可成り有難いので注射が終ると何時も疲れた身體を病院に運ぶか又一つには再び勇氣を取り直して其の日の勞働を祝福する一杯の盃を擧げに行き付けの酒場に歩を運ぶのであつた。

總べての豫防注射が完全に終了して漸く身體が縛られた勞働から解放された夕、L君は意氣揚々と何時もの酒場に姿を現した。今晩は懷中も相當タンマリと暖い。若者は愉快に青春を謳歌してもいいではないか？

L君よ呑　且つ食つた。初夏の夜の快樂を滿喫して其の家を出た。病院に歸つてからL君は何時もと違つた倦怠を感じた。酒を呑んだ後の彼の快い疲勞と

は違つた感じである。何處か身體に無理があつて動くのも動かないで居るのも退儀な氣分であつた。其の夜中に惡感が來た。熱を計ると三十八度三分あつた。其の翌日L君は起きる事が出來ずに同僚の診察を受けた。其の翌日も其の又翌日も熱が下らなかつた。三日目に血液を檢査した結果L君の病氣は腸チフスと決定されて隔離病舍に移された。五〇〇人以上にもチフスの豫防注射をして置きながら餘りに忙しかつた爲めにL君は自分で注射する事をウッカリ忘れて居たのであつた。

誤診

或る軍醫の長女で十年十ヶ月になる少女が年の暮の二十六日に發病した。熱が三十八度内外で食慾が無かつた。二十八日に初診した時に三十八度五分で二日間便通が無く咳嗽が三日程あり此の日の朝咖啡殘渣樣物の嘔吐が一回あつた。

中等度の咽頭炎と氣管枝炎があり胃部がやゝ膨滿して居た。熱性感冒の胃腸型と云ふ診斷を下して其の日は絶食とし止血劑の注射をして歸つた。其の日の中に浣腸は行つたが消化の良い硬便が中等量あつた。

翌日往つて見ると熱は下つて三十六度六分、嘔吐も後は起らず元氣も大分出て來たが胃部は膨滿の程度が少しく強く緊張が胃部から左の下腹部にかけてある。消化のよい軟便が午頃一回あり食慾も少しく出て來たので牛乳九〇グラム

を四時間毎に與へて見ると良く呑み嘔吐も起らないので安心して歸つた。

其の翌朝から猛烈な腹痛を起した。疼痛の場所は胃部から左下腹部にかけて丁度一昨日來膨滿のある部分に一致し壓痛甚だしく觸つても痛むと云ふ鋭敏さである。熱三十七度。脉搏八七、食慾不振、嘔吐無く午前中に一回軟便を見た。最初の咖啡殘渣樣物嘔吐以來其の經過の容易ならざるを感じて少女の父に勸めて外科の開業醫を呼んで對診した。

診察の結果、腸間膜の炎症であらうと云ふ事で未だ外科手術の領分に非ずと云ふ事になつた。腹部に微温濕布を施し經過を見る事になつた。

午後に到るも疼痛は緩快せず猶強くなるので止むを得ず鎭痛劑の注射を行つた。午後四時から嘔吐起り胃液を數回排出した。咖啡殘渣樣物は無かつた。再び絶食にし其の翌日はリンゲル液と葡萄糖液の注射を行つた。疼痛は相變らず強く濕布交換の時も聲を立てゝ泣く程敏感である。嘔吐も止まら無い。父親の知

人で外科の醫者を更に一人頼んで見て貰ふ事にした。
時間の都合で自分は立ち合へなかつたが診斷は「胃漿液膜炎」であらうと云ふ事であつた。此の日も鎭痛劑の注射を餘儀無く施した。

翌日は元日であつた。發病後一週間目、腹痛が起つてから三日目であるが依然容態は同じで徒らに衰弱が強くなつて行くばかりである。此の日は軍醫なる父親と年賀に來た其の友人の内科の醫者と自分と三人で診た。が變つた手當も診斷も付け様が無い。リンゲル液、葡萄糖液の注射は昨日と同様に行つた。此の日は體温は三八度五分より三九度一分、脉搏九五より一一〇、嘔吐、腹痛甚だしかつた。咳嗽は昨日當りから殆ど無く便通も無かつた。

其の夜晩く△△學校の外科醫を呼んで診て貰ふと「腸重疊症」で即刻手術を必要と云はれた。が其の夜は入院をしなかつた。

翌朝疼痛が廣がつて腹部全體が痛んで來た。更に父親の知人の外科醫を呼ん

で見ると今度は「廣汎性腹膜炎」で猶手術の必要は認め無いと云ふ事であつた。併し入院はした方がよろしいと云ふ事に相談が纒つた。入院は最初から自分が勸めて來たのであつたが經濟的事情と乳を呑む兒がある不便の爲めに今日迄決心がつかなかつたのである。

丁度其の醫者が×××病院外科部長を知つて居るので其處がよからうと云ふ事になり、再び×××病院に使ひを出して外科部長を呼んで來た。診斷は「化膿性腹膜炎」で入院はよろしいが手術は無駄であらうと云ふ事である。其れ程患者の容體は危機に瀕して居た。嘔氣も嘔吐も止らず、番茶の外は絶食の狀態でリンゲル液と葡萄糖及び强心劑の注射で保つて居た。

其の日に入院はした。が一般狀態は益々惡く今は時間の問題と云ふ所迄來て了つた。

手術はしても思ふ樣に膿は出ない。併し今は爲るとしたら後に殘された手當

は試みに手術を行つて見る迄で、其れに期待の掛けられない事は勿論、場合に依つては只死期を早める結果になるかも知れない。徒らに苦しませるよりも樂に死なせてやつた方がいゝかも知れない。と病院では外科部長と小兒科部長が少女の父に云つた。

父は迷つて了つた。哀れな少女を此れ以上苦しめ度くは勿論無い。併し其の父も醫者であるので万一の望みを棄てはしなかつた。少女に聞くと、

「此んなに苦しいなら一層手術して死ぬなり生きるなり何方とも決めて貰つた方がいゝ。」

と云ふ返事をした。

「總べてを御任せして手術をして戴きませう。」

と父が外科部長に云つた。

即刻手術の支度がされ、殆んど氣休め的の手術が行はれた。

此の手術迄に此の少女を診た醫者は小兒科醫二人、内科醫三人、外科醫四人、計九人で下された診斷が「胃腸型熱性感冒」「腸間膜炎」「胃漿液膜炎」「腸重疊症」「廣汎性腹膜炎」「化膿性腹膜炎」と種々であつた。

手術の結果はどうであつたか？最初に加へられた切開は左の下腹部縦に七・五センチメートルであつたが濃い膿が非常に大量出て來た。餘りに大量出るので其の膿の出所を探して次の切開が右の下腹部に同じく六センチメートル程加へられた。すると遇然にも病源は胃でも腸間膜でも無く實に蟲様突起炎で其れが穿孔し化膿性腹膜炎を惹起した事が明かになり手術者自身がアッとばかり驚いたと云ふ事である。

蟲様突起炎の徴候は隨分注意して診たのにどの醫者も考へられない所であつたので此の少女を見た醫者の誰でもが此の病源を聞かされた時には唖然とした。

手術の日と其の翌日は落付きはしたもの丶容態は依然危險であつた。自分は此の少女に死なれては耐らないと思つた。必ず生きて呉れる樣にと心から希つた。輸血と注射が行はれた。

手術後四日目から亂れ勝の脉搏が整つて來て漸く恢復の曙光が見えて來た。其の後一日一日と快方に向つて丁度二ヶ月の後、再び懷しい己の家に歸る事が出來た。

蓋し數奇を極めた經過の疾病ではあつたけれども此の患者を見た醫者の誰れもが甚だしき誤診の責を免れる事は出來ない。

糖尿病

糖尿病を宣告された患者があつた。

五十歳になる中老であるがデツプリと肥つた身體は如何にも糖尿病を起しそうに思はれた。

因果な事に此の患者が酒も煙草も嗜まず餅菓子が三度の食事よりも大好きで一日の中餡氣が無いと口寂しくて居られないと云ふ程であつた。

尿中に三%の糖が證明された。其處で糖分の攝取は禁止された。甘い物が食べられ無いと云ふ事は此の患者に取つては實に打擊で今迄が三度の食事より好きな菓子を止められるのは生の快樂を半減されたのと同樣であつた。

嚴格な食餌療法を經て患者は或る程度迄の輕快を見たが將來甘い物の食べられない事を考へて怏々として樂しまなかつた。

或る時此の患者が軽い急性腸加答兒を起して下痢をした。投藥をして食餌の說明をしてやると、

「菠薐草などは如何でせう。」

と云つた。

「菠薐草もいけませんね。消化する事が出來ないのですから。」

「つまり只腸を素通りして了ふわけですね。」

「そうです。吸收されないのだから食べないと同じ事です。それ所かもつと惡くなる。」

「そうすると身體の滋養にも何んにもならないわけですね。」

急いで其の患者が歸つて行つた。

其の翌日其の家から往診の迎ひが來た。

行つて見ると下痢が前日より強い。昨日は一回軟便の程度であつたのが此の

日は既に三回で最後の便は殆んど水様であつたと云ふ。熱も腹痛も無く患者は元氣ではある。

「何か食べはしませんでしたか?」

と訊くと患者がニコニコして答へた。

「先生、昨日は餅菓子をシコタマ食べてやりました。」

「どうして其んな事をしたのです?」

「先生に御伺ひしますとどうせ腸を素通しして吸收しないと事ふ事でしたので此の時とばかり餅菓子を買ひにやつて澤山食べました。旨かつたのです。」

患者は日頃の鬱憤を此の時とばかりに晴らしたのである。唯一の快樂を突然停止された患者の咽喉元三寸の樂しみに喜んで居る無邪氣な顏を見ると咎める所か、何とか慰めてやり度い様な氣の毒さを覺えたのであつた。

保菌者

目睫の間に迫つた入學試驗を前にして腸チフスに罹患した若者があつた。

其の年丁度中學をいゝ成績で卒業して一高の入學試驗を受ける積りで勉強して居た。

自分でも相當準備に自信が出來て居た所へ寢耳に水の腸チフスの宣告を受けたのであるから殊更に可哀想であつた。可哀想ではあつたが醫者として屆け出ないわけにはいかなかつた。其の理由を話して屆出と同時に入院させた。

初めの中は若者も入學試驗を止めて一年を棒に振ると云ふ事を涙の出る程口惜しがつたが試驗の日が愈〻近ずくと却つて觀念して了つて比較的平靜な氣持で居た。居るらしく思はれた。

病氣の方はグングンと良い方に向つて正常な經過を取つて居た。

若者は入學試驗の日を寂しく窓から外を眺めて暮した。今年は仕方が無い、來年こそはと氣を取り直して決心して居た。

一ヶ月で腸チフスは全快した。がチフス菌が取れ切れなかつた。

もう身體はスッカリ恢復して居るので病室の中では平常と同じ樣に暮して居た。一週間に二回宛檢便を續けて行つたが依然としてチフス菌が證明された。

二ヶ月入院して居たが菌が未だ出た。外は櫻が咲いて學生達の新學期が初まつて居た。若者は病院の窓から外の春の景色を眺めながら悶々として日を送つた。病室に受驗の參考書を取り寄せて見たが手には付かなかつた。

二ヶ月半になつても未だチフス菌は無くならなかつた。若者は保菌者の儘で退院した。

家に歸つても一室に這入つた儘外に出る事が許されなかつた。其れは他の人に傳染するからである。

一週に一度宛警察に便を出して調べるのであるが今度こそは今度こそはと思つて出す便が依然として陽性と云ふ結果を聞かされては若者の心は其の度に暗くならざるを得なかつた。

外出する時には同じく警察に届け出でなければならない。其の度に私服の刑事に同伴されるのである。

自分の出た中學校の補習科に行く積りで居た豫定も若者は捨てなければならなかつた。若者は自分の部屋に閉ぢ込もつて參考書を相手に味氣無い生活を續けなければならなかつた。

自分だけは食事も入浴も總べて別であつた。同じ家に住む家族と一緒に樂しく遊ぶ事も出來ず全然特別扱ひに隔離されて生活しなければならないと云ふ事は若者に取つては實に辛い生活であつた。

出す便も出す便も極つて陽性であるので最早や陰性の結果も期待しなくなつ

て了つた。月に一度位は憂さ晴らしに刑事と同伴で活動寫眞を見に行く事もあつたが何時もの樣に明るい氣持で面白く觀賞する事が出來ないので段々に非常に好きな活動ではあつたけれど見に行く事が少くなつて了つた。

世の中は既に夏になつて居た。毎年極つて行く海水浴も兄弟達が喜んで行つた後、若者一人には禁じられて同じ部屋で暑い夏を過さなければならなかつた。

時々出る散歩も若者に取つては一人でこそ樂しい散歩であるのに一一尾いて來る刑事に氣兼しては段々に時間が短くなり回數が少くなつて行つた。

若者は殆んど一部屋に這入り込んだ儘、世間とは沒交渉に暮して居た。顏色が蒼白くなつて以前の樣に元氣が無くなつて了つた。其れでも若者は參考書を相手に一人で勉强を續けて行つた。勉强の外に此の若者には爲る事が何も無かつたのである。

秋になつて兄弟達が賑やかに海から歸つて來たけれど若者は依然保菌者として皆と一緒に遊ぶ事も出來なかつた。皆のはしやぐ樂しい笑ひ聲を聞く度に若者の心は暗い穴の中に居る樣に堪へられない寂しさを味はされるのであつた。

野球、ピクニック、音樂會と樂しい秋も若者に取つては凡そ興味の無い秋であつた。

冬が來た。正月が來た。一年間の勉强で今年こそは受驗が出來るものと喜んで居たのに未だチフス菌陽性の通知を受け取ると若者の心に一抹の不安が漂ひ初めた。又今年も試驗が受けられないのではあるまいか？準備が整つて居ながら試驗が受けられぬとは何と云ふ不幸であらう。

日が經つに從つて若者は烈しい焦燥に驅られて來た。來る通知も來る通知も依然チフス菌陽性と版で押した樣に決つて居た。

二月になつた。入學願書等の手續一切は父親の手で濟まされて居たが、猶便には菌が混つて居た。

二月半ばになると若者は檢査の通知を待つ勇氣も失つて了つた。若者は失望のドン底に落ち込んだ。世の中が眞暗になつて了つた。何を聞いても見ても面白くは無かつた。隱忍して來た此の一年の苦心を省ると自ずと涙が湧き上つた。其の苦心の再び無駄に葬り去られ樣として居る事を考へると泣けて泣けて仕方が無かつた。然も將來、何時菌が無くなるとも測り知られない今の狀態を思ひ廻らす時若者は限り無い不安と悲觀に襲はれるのであつた。今年も來年も再來年も試驗が受けられないとしたら自分は一體どうなる事であらう。友達は皆上の學校に通つて居るのでは無いか？、自分だけが取り殘されて行く、何と云ふ不運、不幸な自分であらうか？。

試驗前、最後に行つた檢査も陽性である事が解ると若者は口惜しさと悲しさ

に居ても立つても居られなかつた。今は世の中に總べての光明、希望を失つて了つた様に思はれた。世の中の總べての事を信用しなくなつた。

參考書をズタズタに引き裂いた。自分で自分の頭を擲り付け、掻き毟つた。世の中の總べての事を否定して了つた此の若者は一高の入學試驗の初まつた日の朝、庭に面した部屋の軒に兵古帶を吊つて首を括つて死んで居た。

其の次に來たチフス菌檢査の結果は發病以來初めて「陰性」と云ふ報告であつた。

忘れられぬ男

其の男も私に取つて忘れられぬ男の一人である。近所の下駄屋の二階に間借して居て風邪を引いたと云つて或る夜自分の家を訪ねたのが初めてであつた。間借して居る部屋は四疊半で其處に彼の外に其の妻君と四歳になる子供が一人居た。

鉢の開いた巾着頭で頤が長く顔がしやくれて頭髪も眉毛も非常に薄く鼻の下には之れも薄い無精髭が生えて居た。元氣の無いショボショボした目は如何にも人が良さそうに見えた。身體も着物も貧弱なものであつた。にも拘らず診察の後に、初對面であるのに盛に政治の話をして政界の巨頭連を誰彼と無く呼び付けにして友達扱ひにして居た。

其の後暫く來なかつた。次に可成り強い胃酸過多を訴へてやつて來た。其の時

は自分は今「大日本地理大系」の編纂をして居るが先ず自分の郷里から起稿し初めたと云つて懷中から數枚の原稿用紙を出して私に見せた。人の良さそうな顏をして居て其の氣焔は正に當るべからざるものがあつた。其の時私の机の上に出て居た文學書の一冊に目を付けて是非借して貰ひ度いと云つて持つて行つた。

其の後も二三回來た。來る度に診察が濟むと彼一流の怪氣焔を上げて私を煙に卷いて行つた。或る時には全國石油株式會社を起すのだと云つて居た。或る時には遊覽飛行會社を設立するのだとも云つて居た。其の恰好はヨレヨレの羽織等を着て居るので滑稽と云ふより氣の毒な樣な氣がして何時もいゝ加減な返事をして歸して居た。或る時藥を取りに來た其の男の妻君が、

「宅の頭は狂つて居るのでは無いでせうか?」と私に訊いた。

「何か變つた素振りでもありますか?」

「變つたと云つても別にありませんが非常に優しかつたかと思ふと急に詰らない事に腹を立てゝ子供を毆つたりして大變氣分にムラがある樣に思はれるのですが。」

と云つた。心に思ひ餘つて居るらしい樣子であつた。思つた通りハッキリ云ふ事も出來ないので、

「私の家に御出での時はそんな風にも見えませんでしたが。」

と云つて歸した。

其の後一回其の男が來た。越すかも知れないから處方箋を吳れと云つて來た。其の云ふ通りにしてやつた。東京では仕事が旨く行かないから郷里に歸らうと思ふなどとも云つて居た。

其の翌日、其の男に部屋を借して居る下駄屋の內儀がやつて來て其の男が今日引つ越すから此方に御拂ひがあつたら今の內に御迷惑の掛らね樣に請求して

置いて貰ひ度いと云つて來た。家にも間代を呉れないと云つて色々の事を看護婦に喋つて行つた。間代も呉れない者に藥代を請求しても呉れる筈は無いとは思つたが先日借した文學書は惜しいので藥局生に取りにやつた。

藥代は勿論初めのから拂ひはしなかつたが本は返して呉れた。其れも荷造りして玄關に出してあつた行李を解いて其底から出してよこしたと云ふ事であつたもう少し遲かつたら其れも持つて行かれて了ふ所であつた。

其の後、其の男の事等全く忘れて暮して居た。一月程經つた或る日「××署刑事」と云ふ人が訪ねて來た。會つて見ると懷中から何時か彼の男に與へた處方箋を出して、

「之れを此の名の男に遣つた事がありますか？」

と訊かれた。人相、年齡、恰好、病氣、當時の住所等を聞いて手帳に書き留めて居た。

「何か其の男がしましたか？」

と訊くと刑事は事も無げに、

「ナニ此奴馬鹿な奴で昨日車坂で私服の刑事に向つて「オイ若えの生命が慾しけりや金を出せ、」と云つて脅迫したので早速上げられて了ひました。呑氣な奴なのでチットも凄味か利かなくて警察に來て、「旦那此りや本當ですか？」なんて悄げ返つて居ますので愛嬌がありますよ。其奴の蟇口の中は無一文で此の處方箋一枚だけ這入つて居ましたので職責上御伺ひに上つたわけです。」

と云つて笑つて歸つて行つた。

彼の男が刑事を脅迫したかと思ふと其の恰好の滑稽さよりも働きの無い男が妻子と共に食つて行かなければならなかつた生活の深刻さを考へて笑ふ事が出來なかつた。

壹萬圓

其の月の十五日迄に必ず壹萬圓儲けさして下さる様にと日頃信心する成田の不動尊に願を掛けた株屋さんがあつた。

思惑買ひが外れて持株がドタ落ちとなり二進も三進も足搔が取れなくなつた末に苦しい時は神頼みと不動様に無理な御願ひをしたわけである。

心の中で七日の御詣りを約束して毎日東京から自動車で成田山に參詣した。

然し毎日、自分の持株は下る一方で帳面の方にも大穴が開き、兜町に古くから持つて居た店も十五日迄に金の工面がつかない時には人手に渡さなければならぬ窮境に立ち至つた。

「何とかして盛り返してやり度い。」と株屋さんは其ればかり考へて居た。二日に初めた御參詣が八日に丁度七日で願が終る勘定になつて居た。

八日に株屋さんは最後の參詣を濟まして歸りの自働車を急がせた。

其の日は東京にも澤山重要な用事が控へて居たので株屋さんは頻りに運轉手に命じて自働車を急がせた。

押上の三つ程手前の踏切を横斷しようとした時に成田發押上行の電車が同じ方角から走つて來た。

踏切で自働車の道と電車の線路は交叉して居たのであるが運轉手は充分電車を拔いて踏切が越せると考へたのでスピードを緩めずに線路の上に走り込んだ。

所が斜に走つて居た電車の速力は案外に速くてアッと云ふ間に自動車の後部と衝突して大音響を立てゝ自働車は踏切の外に跳ね飛ばされた。

電車の方は乘客が將棋倒れになつて打撲傷と擦過傷を負ふた者が數人あつただけで濟んだが自働車の方は大變であつた。車體の丁度後半分が奇麗にもぎ取

られて目茶目茶に破壊され、前半分は溝の中に横様にのめり込んで居た。奇蹟的に運轉臺に居た運轉手はハンドルを握つた儘、氣を失つては居たものの生氣になると前額部と左腕に輕微の擦過傷を負ふただけで何とも無かつた。

客席に居た株屋さんは無慘にも自働車と運命を共にして碎れた後半分の車體の中から即死體となつて引き擦り出された。

其の月の十五日、生前其の株屋さんが契約して居た△△生命保險會社から保險金壹萬圓が兜町の家に贈與された。

銅　貨

近所の子供に一錢二錢の駄菓子を賣つて生計を立てゝ居る貧しい老婆があつた。

年老いて息子夫婦に死なれて、夫婦の殘して行つた幼い女の子と二人で寂しい生活をして居た。

其の女の兒が七歲の時、病氣になつて往診を賴みに來た。

病氣は加答兒性肺炎で相當廣い範圍を犯かされて細かいラッセルが非常に多かつた。

毎日往診して治療して行く中に、いゝ具合に快方に向つて行つて發病後三週間で全快する事が出來た。

其の月の終りに、病氣だつた女の兒が醫療費の請求書を取りに來た。

すると翌日の夜、婆さんがやつて來て其の内の四十錢を拂つて行つた。其れが一二個の五錢白銅を除くと全部が銅貨であつた。

翌月忘れて居る頃、其の婆さんが來て三十五錢拂つて行つた。此の時も殆んど全部が銅貨であつた。

其の翌月の終りにも婆さんが來て銅貨で幾何かの金を置いて行つた。

こうして毎月、月末になると必ず表れて少し宛を拂つて行つた。少ない時には十五錢の事もあつたが、多い時でも六十錢を越す事は無かつた。

三年經つて娘が十歳になつた時、婆さんは醫療費の全部を拂つて了つた。

お春の葬式

お春は滲出性腹膜炎で澤山の借金を殘して死んだ。年齢は四十五歳であつた。

旅館の板前をして居た夫に九年前に死に別れてから一人の娘お鈴と小料理屋を出して一時はお春の愛嬌とお鈴の美貌で相當に繁昌したのであつたが、お春が腹膜炎になつてから蓄めた小金を忽ちの中に醫療費に使ひ果して其の爲めに娘のお鈴が同じ街の高本と云ふ家から藝者になつて出なければならない仕儀となつた。

高本と云ふのは以前からお春が都合の惡い時、チョイチョイ金の才覺を頼んだ事のある家であるが、娘のお鈴が小さい時から習ひ覺えた藝事三味線が役に立つて藝者になつてはどうかと話しのあつた時に病床のお春は暫く考へさせて

呉れと云つて一旦斷つたのであるが、當のお鈴が親孝行の爲めならと大分乘氣になつて殆んどお鈴一人で話を決めて出る事になつたのであつた。

　そうなつて見るとお春も其れに強いて反對する勇氣も無く一時凌ぎの金の爲めに娘には惡いと思ひ自分も進まぬ乍ら自分の病氣が癒り次第退かせる積りで承諾した。

　支度は全部高本で出して呉れた。其の以前からの借金と一本になつて出た支度萬端とお披露目の費用が莫大な借金となつて娘の身體は高本に取られて了つたと同樣の結果となつて了つた。

　氣の勝つたお春が病床でヤキモキしても病氣の方は少しも渉々しく行かず段々惡くなる一方であつた。

　お鈴が暇を見てはお春を見舞ふのを高本では餘り快く思つては居ず時にはお鈴に面と向つて、

「お前の身體は勤めの間は自分の物ぢやないのだからね。時々は仕方が無いがそうチヨイチヨイ家を明けられては此方が困るぢやないか。お母さんは可哀想だらうけれどどうせあんな病氣に取りつかれたんだから急には癒りつこないのだから手當の事だつたらお醫者と家の人に任して置いたらいいぢやないか。此方ではチヤンと其れだけの事はしてあるのだからね。」

とお内儀が長火鉢の向ふで長い煙管でスパリスパリと煙草を喫しながら云ふ事もあつた。

　其れが段々露骨になつてお春がお鈴に會ひ度いと云つて使ひの者を寄越してもお内儀が一人で返事をしてお鈴に傳へない事も度々あつた。

　お鈴の若さと美しさは出て暫くの間に廻り切れない程の御座敷が掛つて土地でも相當の賣れつ妓になつた。

賣れつ妓になると高本では猶更離し度くないしお鈴自身も暇が無くなつてお

春を訪ねる事が段々遠くなつて行つた。

併し度々お店の男を使ひに出して母親の容態を家に訊きにやつたが、其の使ひの者の返事は決つて、

「段々によろしい方ですから御心配無く、忙しい様子で大變喜んで居ます。此方はいい方ですから忙しいのにわざ〳〵來なくとも結構です。」

と云ふ口上であつた。此れを聞くとお鈴は安心して多少訪ねて行かぬ事を氣に咎めては居たものの自分自身の身體も大變忙しく高本の御内儀の氣嫌もいいので出ずに了ふのであつた。

お春の方では仲々に訪ねて來ないお鈴に使ひを立てて金の無心や自分の病氣の段々に惡い事を告げてやるのであつたが娘からは、「とても忙しくて行かれぬが其の内暇を見て行くから。」と云ふ冷淡な返事ばかりであつた。

お春からお鈴への傳言もお鈴からお春への手紙も皆高本の御内儀の下に止め

られてお互が前の様な返事を得て一方は安心し一方は不滿を抱いて居た。

お春の病氣は段々惡くなつて行つた。もう此の頃は一人で身體が動かされぬ程になつて居た。が勝氣なお春は浮腫で病的に眞白く膨れ切つた足を持て餘しながら高本の娘には、來て呉れとも云はなかつた。

娘の不人情な態度にスッカリ怒つて了つたお春は、お鈴が母親の嗜好の蒲鉾をわざ〳〵届けてよこした時も、

「有難くも無い。蒲鉾の身代りなどは眞平だよ。」

と荒々しく使ひの者に聞えよがしの返事と一緒に突き返した。

併し此の蒲鉾はお鈴の所迄は歸らなかつた。お鈴は母親が其れを喜んで食べた事と信じて居た。

高本の御内儀の性質を不斷から知つて居たお春であつたので娘の來ないのは御内儀の爲めだとは百も承知では居た。

「併し過には來て呉れたつてよさそうなもんぢやないか？」
と常日頃、あんなに自分にもよくして呉れ自分も可愛がつて居た娘の事であるので、日に何遍も愚痴が出て周圍の人をハラ〳〵させた。
ジメ〳〵と五月雨が五日も續けて降り續いた朝、お春の病氣は急に變つた。流石に其の由が高本に知らされた時には剛情な御内儀も其れを握り潰して了ふ事も出來なかつた。
大急ぎでお鈴が母親の所に馳け付けた時にはお春の意識は全く溷濁して了つて居た。不氣味な迄に浮腫んだ頰は蒼白く張り切つて生きて居る者の樣には思はれなかつた。醫者の出來る總べての手當もし盡された後であつた。時々物に怖えた樣な輕い痙攣を起した。見えない白い眼が半ば開かれて天井を睨んで斷へずビク〳〵と動いて居た。
其の日の午後、自分の娘に看病されて居るのも意識せずにお春は死んで行つ

た。
翌日も又ジメ〳〵とした雨であつた。未だ熟し切らない無花果が木に着いた儘腐つて落ちた。
お春の葬式が雨の中を出た。此の土地の習慣でお春は土葬にされるので白い布で蔽はれた四角い棺の中に收められて長い行列を作つて街を練つて行つた。
幕場への道順で葬式は高本の前を通つて行かなければならなかつた。
丁度お春の棺が高本の前迄來た時に棺擔ぎの一人が肩を變へる爲めに擔へ棒を右から左に移した。其の時に雨で濡れたぬかるみに片足を踏み込んでツルリと辷つて思はず片棒を引つ外ずした。
棺桶は中心を失つて其の男の方に傾いてズシーンとばかり響を立てゝ地上に落ちた。
白い布がずれて蓋が跳ね上り死んだお春の頭がニュッと出た。棺擔ぎ達は悲

鳴を上げて飛び退いた。お春の半ば開かれた白い眼は高本の家の中をジッと見て居る様に見えた。
世話人が驚いて死人を元の様に棺に收め泥だらけの葬式が再び雨の街の中を練つて靜かに動き出した。
お鈴は其の後、高本を止めて東京に出て矢張り藝者をして居ると云ふ事である。
高本も今では以前の様に、はやらなくなつた。
「お春さんは高本の御内儀を酷く恨んで居たからねえ。」
と蔭口を云ふ者があつた。

クループ氏肺炎

大きな御邸の門番をして居る家の娘が病氣になつたので往診した。
父親は御邸に出て居て留守で母親一人が病人を看護して居た。年寄りの母親で人の好さそうな顔をして居たが非常に無智な所があつた。
既往症を訊くのでも可成り骨が折れた。娘は十七歳になる獨り娘であつた。十一歳の時に「シブツ」をやつたと云ふのがどうしても解らなかつた。「シブツ」とは何であらう？「死物」と云ふ字を當てゝ見たが解ら無い。何遍も問ひ返して居る中に其れが「チフス」である事が漸く解つた。其の翌年、「ショーボー熱」をしたと云ふ。此れが又解らなかつた。
「其れは火事の流行つた年の暮で、娘の身體も火の着いた様に熱く赤くなつたがお藥を呑んだら直きに冷めて來た。」と云ふ。其れで「消防熱」かと首を

捻つたが赤くなつたと云ふ言葉で其れが、「猩紅熱」である事が首肯出來た。

萬事が此の調子であるから餘程此方で考へて聞かねばならなかつた。病氣はクループ氏肺炎であつた。患部に濕布を行ふ樣に其の仕方も敎へて歸つた。

翌日行つて見ると胸部の濕布がして無かつた。

「濕布をしなければいけないね。」と云ふと、

「濕布はチャンとしてあります。」

と云つて足の方を捲つて見せた。見ると兩側の足關節の部分に昨日敎へた通り丁寧な濕布が施してあつた。

「昨日先生がクルプシ肺炎と云はれたから一生懸命にクルプシに濕布をして居るのです。」

年寄つた母親はキョトンとした顔をして眞面目に答へたのであつた。

見舞

チブスで入院した男の子が居た。

十三歳になる少年であつたが柄が大きくて十五歳位には見えた。チブスが可成り重かつたので一時は非常に危險な所迄行つたが幸に中途から快方に向つて其の頃には非常にいゝ方で日增しに殖える食餌と體重とを樂しみに退院の日を指折り數へて待つて居た。

お粥の量が一〇〇グラムと決められて三回與へられるのであるが恢復期に向つて犬の樣に旺盛な食慾には餘りに少な過ぎる量であつた。少年は食事の時間を何より樂しみにして極めて出される一碗の粥の一粒も殘す事無く貴重な物を樂しむ如くに味つた。

或る日、知人の見舞客があつた。

話しをして居る中に丁度午になつて了た。遠方から來た客であつたので病兒の母は氣を利かして近所の仕出屋から鰻を取つて出した。

鰻！少年の飢えた目が鰻の入物に吸ひ付けられて客の持つ箸の一上一下に連れて動いた。何と云ふ御馳走だらう！鰻！あゝ、食べて見度い！と少年は心から思つた。少年の口には唾液が泉の樣に湧いて出た。腹の中では腸が蠕動してグーグーと鳴つた。

客が箸を止めた。少年の目も其れと共に止つた。客は箸を置いて鰻の入物に蓋をした。少年の目は其の入物から離れなかつた。未だ少し殘つて居るだらうと少年は考へた。

暫くして客は歸つて行つた。

少年の母が其れを見送つて玄關迄出て行つた。

其の留守、部屋には誰も居なかつた。機會は今だ。此の時の少年の頭には鰻

の外には病氣の事も何も無かつた。

少年はベツトからテーブルの方に躙り寄つた。手を延ばして入物の蓋を取つた。覗き込むと未だ三分の一程殘つて居た。

イキナリ鷲掴みにして鰻の一片を口の中に抛り込んだ。味ふ暇も無く呑み込んで了つた。汁の泌みた御飯を之れも手で掴んで口に入れた。其れは軟い味の薄いお粥に比べて何と云ふ旨さだらう。死んだつていゝと少年は思つた。

廊下に足音がした。少年は素早く蓋を元通りにして布團の中に潜り込んだ。這入つて來たのは客を送つて出た母であつた。

其の夜中から少年は苦しみ出した。腹が絞られる樣に痛んだ。スツカリ下つて居た熱が再び上つて三十九度に達した。

一晩中苦しみ通した揚句、翌朝血液を混じた粘液便をして死んで了つた。

醫者が急に惡くなつた少年の病狀に首を傾げた。

死ぬ少し前に少年は母だけを枕元に呼んだ。看護婦も出て行く様に母に頼んだ。

母一人になると少年は時々起る痙攣性の腹痛を耐へながら云つた。

「お母さん、僕惡い事をしました。昨日御客様の歸つた後で殘して行つた鰻を食べました。あんまり食べたかつたもんだから。こんなに苦しいんだつたら止せばよかつた。先生の云ふ事を聞かなかつたから罰が當つたんですね。」

母は飢えた子供の目の前で御馳走を出した不注意を今更後悔したが間に合はなかつた。

此の事を醫者にも話したが其の時には既に施すべき手當が無かつたのであつた。

誤嚥

ゴムの乳嘴に付いて居る金物を誤つて呑んで了つたと云つて連れて來た七ヶ月の乳兒があつた。

レントゲンの力を借りて見ると成る程直徑一・三センチメートル程の丸い異物が盲腸部に引つ掛つて居る。呑んだのは昨日の午後だと云ふ事である。

藥を與へて熱、嘔吐、苦悶等があつたら直ぐ連れて來る様にと云つて歸した。

異物は其の翌々日の朝、身體には何の故障も起らずに便と一緒に出た。

今後よく氣を付けて必ず此んな事の無い様に母親に注意して置いた。

其れから四月經つて子供が十一ヶ月になつた時、再び其の兒を連れて母親が蒼くなつてやつて來た。又誤嚥をさせたと云ふのである。

其の時小兒は上に四枚、下に二枚の門齒が出て居たが、小兒の眠つて居る枕

元にウツカリ腕時計を置いて隣りの部屋で仕事をして居る中に、目を醒ました子供が延ばした手に觸れた腕時計をアグリと食べたと云ふ事である。

急に泣き出した子供の聲に驚いて部屋に這入つて見ると口の周圍を血だらけにして左手に腕時計を持つて居た。急いで口を拭き布團の邊りを調べて見たが直徑二センチメートル程の時計の硝子が半分程見付からないと云ふ。

口唇と齒齦の一部に輕度の切傷がある。其れは處置して了つたが硝子の誤嚥には困却して了つた。

口と同様に此の小兒の軟い胃腸の組織を傷付けて行つたら身體の外にガラス片が排出される迄此の小兒の生命は非常な危險に曝されなければならない。

食餌と藥の飲み方を教へて若し變つた事があつたら直ぐ連れて來る様によく云ひ含めて歸した。

翌朝連れて來たが平常通りで何の變化も起つては居なかつた。便も平常通り

一日三行で消化も惡くは無い。やゝ安心して其の日は歸した。

其の翌日も同様何の變化も起らなかつた。が日暮方、「こんな御通じがありました。」と云つて硝子様の粘液を含んだ便を持つて來た。探して見たが硝子片は見付からなかつた。

其の次に見た便はもう消化のいゝ普通の便であつた。

四日間續けて見たが何等の變化も認められなかつた。

硝子は果して這入つたのか？這入つたとして安全に出たのか？其れは其の母親にも自分にも解らない。只子供が安全であつた事は事實で自分も母親も安心したのである。

娘の幸福

其の娘の家は生計が餘り豊かでは無かつた。小學校を卒業すると同時に或る製菓會社の女工見習に出される事になつて居た。其の事を娘は別に辛いとも悲しいとも思つては居なかつた。何事も善意に解釋出來る少女の純な夢を此の娘も持つて居たのである。

卒業式の日は皆と別れる事よりも卒業と云ふ事が嬉しくて仕方が無かつた。卒業式後は六年間を一緒に暮した少女達が今日別れなければならない懷しい教室に集つて賑かな茶話會を開いた。樂しい悲しい最後の茶話會であつた。

少女達は歌を歌つたり話をしたり隱し藝をしたりして大はしやぎにはしやいだ。交り番に教壇に立つて少女の一人一人が何かする度にドッと喝采の聲が上つて部屋が割れるばかりであつた。其の娘も立つて歌を歌つた。皆と一緒に手

を叩いて騒いで居た。その中に、

「アッ！」

と低い聲を立てると机の上に俯伏しになつて了つた。友達が驚いて見ると蒼白で苦しそうな顏をして居た。

「どうしたの？どうしたの？」

と、友達が口々に尋ねても一言の返事も出來なかつた。少女の一人が先生の所に飛んで行つた。先生が來て其の娘を見た。樂しさに湧き返る様に賑やかだつた教室は一瞬水を打つた様に靜まり返つて皆の呼吸の音が聞き取れる程であつた。

娘の顏から苦悶の痕が消えて眠つた様に安らかに筋が弛んで來た。もう娘の心臓は動かなかつたし呼吸もしなかつた。

「もういけない。」

と云ふ先生の言葉を聞くと娘を取り卷いて居た小女達の間に忽ち啜り泣きの聲が起つて其れが激しい嗚咽の聲に變つて了つた。

小使ひが走つて醫者を迎へに行つたけれど死んだ娘は再び生き返りはしなかつた。死因も「心臓麻痺」とより解り樣が無かつた。死んだ娘を取り卷いて少女達は暗くなつても誰一人歸らうとはしなかつた。少女達は目を泣き腫らして生前の娘の非常に細かな美點や印象迄も語り合つた。

此の娘の葬式には同窓の少女が全部見送つて吳れた。樂しい卒業式に突然に死んで行つた此の娘の短い生涯は果して不幸だと云へるであらうか？苦しみ多き世の荒波に揉まれる前に親の愛翼の下に悲しみも知らずにスクスクと延びて友達とチリヂリになる前に皆に惜しまれ悲しまれて送られた短い一生の方が此の娘に取つてより幸福では無いとは誰が云へよう？。

運・不運

咽頭ヂフテリャになつた三年八ケ月の女兒が居た。

其の兒には血清注射をして病院に送つた。ヂフテリャの方は先づ正常の經過を取つて治癒しつゝあつたが其の經過中心臓衰弱を起して十五日目に斃れて了つた。

其の後其の母親は醫療費を拂ひには來ないし、道で會つても橫を向いて知らぬ顏をして居る。

或る時其の母親に會つたので此方から側に行つて話しかけて見た。併し彼女は、「彼の節は色々御世話樣になりました。」と云ふ一片の挨拶をさへしようとはしない。此方が默つて居れば何時迄も默つて居た。話しかければ最小限度に節約した言葉で返事をした。其れがまるで木で鼻を括つた樣に冷たい言葉で取

り着く島も無い挨拶である。自分は非常に不愉快な寂しい氣持で別れた。

醫者は病氣の診斷と治療はするが其れ以上の事は出來ない。人一人宛に定められた運命を變へる事も出來ないし況してや其の人の生命を延ばす事も出來ない。

ヂフテリヤで死んだ兒と其の母の爲めに次の四つの話を書いた。

(一) 運が良かつた話

其の娘は或る有名なデパートの五階の食堂に勤めて居た。

十二月半ばの或る朝、非常に頭が痛むと云つて出勤の途中から引つ返して來て診察を求めた。診ると流行性感冒であつたが熱は三十七度三分しか無かつた。今日は休まなければいけないと手當と藥を授けて歸した。

歸つて寢て居ると號外が盛んに出て自分の勤めて居るデパートが火事で多數の死傷者を出して今猶燃燒中だと云ふ知らせであつた。後で知つた事であるが

其の時に其の娘のよく知つて居る友達が二人迄死に數人が負傷して居た。

家族の人々は娘の幸運を互に喜び會つた。

病氣の方は大して重くもならなかつたが微熱が取れ切れなかつたので一旦郷里の××に歸つて一時靜養する事に相談した。

上野驛に行く途中電車の乘り換えに待たされて驛に着いた時には僅かに二分違ひで乘り遲れて了つた。其の次の汽車だと先方に着くのが餘り遲くなるので出發は明日に延ばす事にして歸つて來た。

其の翌日の朝刊に昨日娘の乘らうと思つた列車が××驛に這入る少し手前で衝突脱線して夥しい死傷者を出した。乘り遲れずに旨く間に合つて居たら今頃は娘もどうなつて居るか解らなかつたと家族の人達は一再ならず娘の運の好かつた事を語り合つて喜んだ。

其の事件の爲めに郷里行きも一時中止になつて居る内に微熱も何時の間にか

取れて癒つて了つた。

其の内に勤め先のデパートの復舊工事が進んで娘の健康も從前通り恢復したので再び勤務に出た。

今でも娘は健康に働いて居る。

（二）運の惡かつた話

五歳になる女の兒であつたが五月の海軍記念日と日曜とが重なつた日に父と母と三人連れで伊豆の田舍に一日泊りの旅行に出掛けた。

其の夜の宿で發病した。下痢は無かつたが嘔吐と共に非常な高熱を出した。田舍の宿の事で檢溫器も何時買つたか解らぬ樣な舊式の頑固一點張りの物で正確には解らぬが其れで計つて見ると四十一度あつた。

宿には箆麻子油が無かつたので藥屋に宿の若い衆を走らせた。藥屋と云つても宿から一里ばかりあつた。更に其の村には醫者は小兒科專門等があり樣筈は

無く外科、内科、產婦人科等全科を見る醫者が一人切りしか居ないのであるが其處とても宿から二里程の距離があつた。兎も角其處にも使ひを立てゝ貰つた。病兒の方は夫婦で交替に手拭ひで冷して居るのであるが熱は益々高くなつて來る樣に思はれるし時々譫言等を云はれると殊更心細くなつて母親等はもう目に一杯涙を溜めて居た。

其の内に漸く藥屋に行つた若者が歸つて來たので早速買つて來た箆麻子油を與へると五分と經たない内に皆嘔いて了つた。與へた箆麻子油の倍量もの嘔吐なのである。浣腸してやらうと思つても浣腸器が無かつた。

醫者に使ひに行つた者が仲々歸つて來ない。道程も可成りの距離であるから時間も相當掛るのであるが使ひに行つた男が少しデレリとした間の拔けた男なので夫婦の者の氣の揉め樣と云つたら無かつた。

三時間程で、其の男が歸つて來た。醫者は隣り村に往診に呼ばれて出たばか

りであるから今夜の間には合ひ兼ねるであらうと云ふ暢氣な返事であつた。

時間が經てば經つ程段々惡くなつて來る様な不安に襲はれて終ひには夫婦共居ても立つても居られない様な焦燥を感じた。

「東京に歸らう。」

と父親が決心して云つた。此の病人を動かす事には夫婦共心配で無い事は無かつたがさりとて此の儘手當もせずに放置して置くには忍びなかつた。兎に角醫者の居る所に行つた方が幾らかでも氣が樂な様に思はれたので母親も直ぐ贊成した。時間を見ると未だ終列車には間に合ひそうなので宿の者を急がして自動車を呼んだ。そして止めるのも聞かずに出發した。

生憎な事には何處迄も間が惡くてもう直ぐ停車場と云ふ所で自動車が故障を起して了つた。運轉手が暗闇に下りて其の故障を直し始めたが眞暗なので仲々思ふ様に行かなかつた。其の內に段々時間が經つて汽車の轟きが響いて來た。

自動車の故障は直つたが停車場に着いた時には汽車は疾くに出て了つて居た。

病兒を抱いて停車場で途方に暮れて了つたが醫者を探ねると二つ停車場を越した××に行けばあるだらうと云ふ事であつた。其んな知らない土地の醫者に行くよりは矢張り東京に行く方がいゝと云ふので停車場で別の自動車を雇つて東京迄飛ばす事にした。

漸く其處を出發して闇の中を東京に向つて長驅し出した。車の中で母はシッカリと病兒を抱いて今は只神に祈りを捧げて居るだけであつた。自動車の中の數時間が夫婦にとつては永劫進まざる時間の様に思はれて自動車の速力が牛の歩みの様にまだるこく氣ばかり急かれた。運轉手を頻りに急がせたので途中で先刻の終列車を追ひ越した。

自動車の中で子供が痙攣を起した。其れとても人無き街道を驀地に闇を裂いて突進して居る自動車の中ではどうする事も出來なかつた。父親は今は何處の

醫者でも構はない。道の兩側にある醫者なら何んな人にでも例ひ外科でも婦人科でも見て貰はうと思つて左右に目を配つて赤い電燈ばかりを探して居た。二度程赤い電燈を見て自動車を止めて見たが一つは産婆で今一つは按摩揉療治であつた。其んな事で無駄に時間を取つては猶更遣り切れ無いので兎に角横濱迄は止らずに走つて貰ふ事にした。

自動車が横濱に着いたのは一時過ぎて夜の晩い街もゝう一時では起きて居る家も無かつた。最初に見付けた内科の醫者を起すと、「先生は二日程前から風邪で寢て居て患者さんは晝間でも御斷りして居る。」と云ふ情けない返事であつた。其處で小兒科の醫者を敎へて貰つて次に起こした醫者に漸く診て貰ふ事が出來て夫婦共ホッと太息をついたのであるが今度心配なのは子供の容態であつた。

醫者は非常に難かしそうな顏をして診察した。脈を見ただけで先きに一本の

注射をした。其の注射も痛みを感ぜぬのか子供は泣きもしなかつた。

診斷は疫痢で殆んど絶望の狀態だと聞かされた時は母親は驚きと悲しみの爲めに危く卒倒しかゝつた位であつた。

其處から警察に電話で傳染病の屆出をした。病室を持たぬ醫院であつたが醫者が親切な人であつたので診察室のベットに寢かして手當はしてくれた。が何をしてももう病兒の反應は無かつた。

迎ひの寢臺自動車の來る迄持たず病兒は見知らぬ土地の醫院の一診察室で其の夜の明け方に息を引き取つて了つた。屆出をした後なので其の屍體を其の儘東京に持つて來る事も出來なかつた。醫院から隔離病舍へ、隔離病舍から火葬場に運ばれた。

喜び勇んで出掛けた其の子が再び懷しい我が家に歸つた時には一片の生無き白骨と化して冷たい壺の中で悲しくも其の父親に抱かれて居たのであつた。

（三）　運が好くて助からなかつた話

非常に冒險の好きな惡戯盛りの男の子であつた。

年齢は七歳であつた。自轉車を飛ばして遊んで居る中に大きな建物の角をスピートを緩めずに曲つた拍子に自動車と正面衝突をした。自動車が急ブレーキを掛けて止つたが子供は二間も跳ね飛ばされた。

其の建物が外科の病院で衝突した自動車に乘つて居たのが丁度其の外科の病院の院長であつた。其の時間に或る患者の整形手術を行ふ爲めに自宅から病院に來た所であつた。

子供は直ぐ入院させられた。丁度前額部に二センチメートル位の裂傷と右の腰部と下腿に打撲傷を負ふたのである。準備された整形手術の道具が其の儘其の子供に使用された。直ぐに告げられて驅け付けた子供の親と手術を終つた院長との間に相談が成立した。災難と云へば災難であるが大切な子供に傷を付け

たのであるから入院料醫療費は全部病院で持つ事になつた。其して更に子供の不注意であるからと辭退する父親に少なからぬ慰藉料が贈られた。

十日目に拔糸して見ると縫合は相像以上のいゝ結果で氣を付けて見ても前額部の傷痕は認め難かつた。打撲傷も勿論惡い筈は無く其の頃は病室から廊下廊下から階段を上つて屋上に昇つたり下りたりして居た。

御見舞に貰つた玩具の飛行機を持つて屋上に上つた子供が仲々歸つて來ないので附添の家族の人が呼びに上つて見ると子供は屋上には居なかつた。應接室を見ても居なかつた。眞逆外に出たのではあるまいと外も見廻つたが外にも居なかつた。

所が其の夕方思ひ懸けない所で發見された。病院と隣りの自動車屋の間の狹い露路に玩具の飛行機と一緒に屋上から落ちて頭蓋骨折を起して即死して居た。

（四） 運が惡くて助かつた話

祖父の法事を行ふので家の中がゴタ〳〵と非常に忙しくして居る最中に熱を出した子供があつた。

二年一ヶ月になる男の子であつた。熱があつて咳嗽が少し出た。寒い頃であつたので風邪だらうと下熱劑を呑まして寢かし付けた。

翌日も後始末で家の中は忙しかつたので遂忘れるとも無く忘れられて午後になつて了つた。其の日は鼻汁が出て食慾が何時も程無かつた。午後になつて額を觸つて見ると大分熱があるらしく熱かつたので近所の小兒科の醫者に連れて行つた。行て見ると午後なので醫者は往診に出て留守であつたので診て貰はずに歸つて來た。夜醫者の歸つた時分に連れて行こうと思つて居る中にスャ〳〵と眠つて了つた。

三日目になつても熱が下らずに咳嗽があるので掛り付けの醫者に診て貰ふと「氣管枝炎」と云ふ診斷で呑藥と吸入をさせる様にとの事であつた。

第四日目になつても良くならないばかりか咳嗽で咽頭が痛そうである。熱も下らないので昨日の醫者に往診を求めると時間が遲くなるかも知れないと云ふ。待つて居る内に病兒が呼吸が段々苦しそうになるので待ち切れずに他の醫者に來て貰ふと「加答兒性肺炎」の徵候が見えるから入院した方がよからうと云ふ。家族で相談の結果、或る大きな病院に入院させた。入院した時には呼吸は益々苦しく口唇等は紫藍色を呈して居た。

小兒科の部長は歸つた後であつたが當直の醫員が診て容態の只ならざるを知つて咽頭から粘液を取つて染めて見たが疑つて見たヂフテリヤ菌が出なかつた。然し其の症狀が「喉頭ヂフテリヤ」と診斷した其の醫員は大量の血清を注射して様子を見る事にした。然も患兒の容態は刻々惡化するばかりで其の夜中には呼吸困難の爲めに殆んど瀕死の狀態に陥つて脉搏も休みながら喘いて居る様な狀態になつて了つた。

もういけないとは思つたもの丶其の苦悶を見るに忍びず小兒科の醫員が立ち會ひの上、外科の部長に「氣管切開」を行つて貰つた。切開と同時に多量の濃い粘膜樣物をガーゼと共に切開部から吹き上げた。同時に潮の引く樣に患兒の面から苦惱が薄れて行つた。

三十分後には口唇や手指のチアノーゼが消失して呼吸が非常に樂になつた。先刻の喀出した膜樣物からヂフテリヤ菌が證明された。其れからの經過は普通のヂフテリヤと變りは無かつた。只身體の恢復が思ふ樣に行かなかつたので二ケ月入院して居た。

もう一歩遲れたら此の兒の生命も恐らく取り止める事は出來なかつたかも知れない。其れは一方から云へば決して運が惡いとは云へないが手術する迄の運命は決して好かつたとは云へない。

蠶

或る年の夏、避暑を兼ねて上州の赤城の山麓の小驛にある醫院に招かれて行つた事がある。此れは其の時の話である。

往診の依賴を受けて或る夕、人力車で山道を辿つて行くと兩側の木々の枝から盛んに蛙が鳴く。此の地方の蛙は地に居ずに木に居る。其れは麥が實ると其れを刈り取り、刈り取つた畠を鋤き返し、之れに水を引いて一夜に田とする。田になると木の蛙は地に下りて土で鳴く。畠の內は丁度、蟬の樣に木々に居て鳴いて居る。

蛙の鳴く山道を通つて、藁屋根の農家に着くと、家中所狹き迄に蠶の床が幾段にも積み重ねられて家族は一人殘らず忙しそうに働いて居る。患者は三歳の小兒で部室の一隅の蠶床の薄暗い下に蚊屋を釣つて寢て居た。

病氣は消化不良性消耗症で甚しく惡かつた。其の由を家人に告げて手當と食餌とを敎へて歸つた。

翌日、又蛙の鳴く山道を通つて往診すると患兒は昨日より猶、惡くなつて居た。訊いて見ると昨日敎へた手當は何もして居無かつた。忙しくて子供の方迄手が廻り兼ねると云ふ事である。

「子供の命と蠶と何方が大切なのだ？」

と此方も思はず意氣込んで詰問すると、人の好さそうな額に黄色い皺のある主人は別段怒りも笑ひもせずに答へた。

「其れは先生さん、お蠶樣の方が大事でがさァ。子供は可哀想で無え事は無えが又幾らも出來る。がお蠶樣を今放り出した日にや、俺等一家は一年間、物を食ふ事も出來やせん。」

此の地方の農家の大部分は蠶で一年の生計を殆んど支へて居るのであつた。

其れを聞いて見ると其れ以上此の人の好い主人を責める事も出來なかつた。私は大變考へさせられて歸りの人力車に振られながら心の中は重かつた。

翌日、行くと又惡くなつて居た。

其の翌日、往つた時には患兒は死に瀕して居た。此んなに惡くとも人手が足り無い爲めに醫者を迎ひにも來なかつた。

自分は患兒の枕元に坐つて、哀れな子供が最後の息を引き取る迄、診てやつた。床の周圍では蠶が桑の葉を蝕む音が、丁度雨が降る樣に激しい音を立てゝ居た。

歸りは夜の山道を淡い提灯の燈を付けた人力車に振られながら道の兩側で競ひ鳴く蛙の聲も一向に耳には這入らなかつた。

橋

此れも上州の田舎に行つて居た頃の話である。

山の上から往診の迎ひが來た。迎ひの者は尻を紮げて脚絆に草鞋掛けで五里の道を夜中に發つて走つて來たのである。

出掛ける迄、迎ひの者は玄關で待つて居て、人力車と一緒に驅け出した。山の事とて坂が甚だ多いのであるが、險しい坂の下に村の若者が傍の切石に腰を下して待つて居た。

「待つてたぞォ。」

と若者は車夫に聲を懸けると先刻の迎ひの者と三人で其の坂を押し上げた。

暫く行くと又坂がある。其の坂の下にも一人の屈强の若者が待つて居て、車を坂の上迄、苦も無く押し上げた。

「下りよう。」

と云つても、

「アーニ、下りつことは入らねえのだ。」

と云つて下しそうも無い。

こうして次々に坂を押し上げて目的の村に着いた時には人力車を押す若者が五人もになつて居た。

患家の前に小川があつて透き通つた冷たい水晶の樣に美しい水が流れて居た。其の小川の上には朽ち掛けた土橋が一つ懸つて居たが人一人が通れる幅の物で、人力車を通すには狹過ぎた。

人力車を下り樣とすると村の若者が周章てて止めた。

「先生さん、下りる事ア入らねえ。」

下りる事は入らなくとも下りなければ通れる橋では無い。どうするのかと思

つて居ると一人の若者が他の若者達に、

「擔げ。」

と云ふといきなり、人力車を五人で神輿の様に擔ぎ上げて、アッと云ふ間に小川の中にジャブジャブと這入つて行つて越して了つた。

患家の前には家族や近所の人が五六人も立ち並んで人力車を迎えて呉れた。

患者を見る前に奥の一間に招ぢ入れて豫め用意してあつた酒肴を勸めて下にも置かぬ饗應である。病人を見に來たのか、お客に來たのか解らぬ程である。然も患者を診察し終ると更に席を改めて近所の人も共に醫者を取り卷いての酒宴であつた。

病人が惡かつたので翌日又往診に行くと、昨日の小川の上に新らしい木を組み合せて人力車の通れる樣な橋が出來上つて居た。

負ふて歸る

此れも田舍に行つた時の話である。

山を越えて五里の山道を曉方に家を出て歩いて來た老人があつた。

若い者は蠶に忙しいので自分が來たのだと老人は云つた。此の老人は跛で、病人は老人の脊中に負はれた子供であつた。

老人が醫院に着いた時は九時過ぎで暑い夏の陽がギラギラと照り附け初めて居た。

醫院の玄關で額に流れる汗を拭つて子供を下して見ると、哀れな子供は老人の脊中で既に息が絶えて居た。

「もう駄目だとは思つたんだが一度見て貰ふべえと思つて。」

と老人が云つた。

案外、平氣で子供の死を泣いたり悲しんだりする様子も無く無表情に附け加へた。

「たつた一人の孫だがね。可哀想な奴さ。」

老人は休む事もせず子供を再び脊負ひ直した。屍兒は老人の脊中で白い薄目を開けて黄色い硬ばつた顔を上に向けて居た。

老人は無雜作に其の顔に手拭を冠せて、立ち上つた。

「御世話様でがした。」

と云ふと日のカンカンと當る埃つぽい通りにスタスタと出て行つた。

自分は子を負ふて歸る其の老人の後ろ姿が桐の木の蔭に隱れる迄、玄關に立つて見送つて居た。

或る醫者の死

學校を卒業して醫學士と云ふ稱號だけを得て未だ研究室にも行かず病院にも勤めずに死んで了つた醫者があつた。

其の男はGと云つた。眞面目な性格の男で學生の時には殆んご遊ぶと云ふ事もせずに其れと云つて勉强ばかりして居ると云ふのでも無く、友達の誰にも好感を持たれて居たが特別に親友と云ふのも無い男であつた。家が田舍の素封家で裕福な上にG自身が比較的年齡を取つて居た爲めに學生の内から妻帶して居た。其の妻君も田舍の親戚から貰つた人で此れも結婚を急いだ爲めに、未だ娘々した女でGと一緒に毎朝東京の女學校に通つて居た。

Gが臨牀の卒業試驗に出された課題は「結核性腸潰瘍」であつた。Gは以前から肺尖加答兒があつて内科の教授にも診て貰つて居たので結核に就いては割

合に出來のよい答案をする事が出來た。そして卒業すると直きにG自身に此の「結核性腸潰瘍」の徴候が表れて來たのであつた。勉强をした直ぐ後なのと自分の受けた臨牀試問なので此の徴候は餘りにもGの記憶には生新らしく深刻に感ぜられた。

食慾の缺損、血液濃汁を含んだ夜間下痢、鼓腸、消耗性熱型、右腸骨窩の壓痛等孰れも暗んじて居る恐るべき症狀が慘酷にも次々と己の身體に表れて來た。

先輩の醫者や敎授にも診て貰つた。誰れもが其の診斷の結果と豫後を明らかに云はなかつたがG自身には病氣の經過と己の運命とが明瞭に豫知されて居た。氣休め的の慰めを友達から云はれる時にはGは寂しい微笑を片頰に浮べて、「有難う。」と素直に答へた。併し決して其れを信用しては居なかつた。

Gの容態は日增しに刻々と危險な經過を取りつつあつた。身心に衰脫を來し

初めた。或る日Gは其の妻と父母とを枕元に呼んで自分の死後の細々した遺言をした。其れから妻に命じて比較的親しかつた友達にも別れの手紙を口授して書かせた。此の手紙を貰つた友達は皆忙しい暇を割いてGの枕元に集つた。

其等の人々にも、ハッキリとした口調で別れの挨拶をした。父母や妻にも今迄の看護を謝して挨拶をした。挨拶をした後に昏々たる眠りに落ちて行つた。其の時に、Gの手紙を貰つた友人の一人に遠い所に居て直ぐ會ひに來られない者が居た。其の友人は其の手紙を受け取ると同時に其の地を出發したのであるがGの所に着く迄には三日掛るので到底臨終には間に合ふまいと誰れもが思つて居た。

Gの眠りは沼の様に深くて何時醒め様とも知れなかつた。恐らくは此の儘死んで了ふのであるまいかと、友人の醫者達は考へて居た。

Gは飲まず食はずに眠つて居た。時々する强心劑やリンゲルの注射も苦痛を

覺えぬらしい様子であつた。そして三晝夜眠り續けた。

四日目の朝、手紙を貰つた最後の友達がGの枕元に驅け附けると待ち構へて居た様にGが死の眠りからポッカリと目を開いて、

「F君、待つて居た。遠い所を濟まなかつた。今迄色々御世話にばかりなつた。有難う。僕はもう逝くから後はよろしく賴む。身體を大事にして呉れ給へ。」

と云ふと安心した様に再び目を閉ぢて了つた。其の儘、Gは醒める事の無い眠りに落ちて行つた。此の若い醫者の落ち附いた立派な最後に深く感じて其の死を惜しみ悲しまぬ者は誰も無かつた。

市松模様

十八歳になる美しい娘がクルーブ性肺炎で入院した。下町で育つた純日本式の娘で好みも何から何まで日本好みであつた。例へば髪も女學校以外には銀杏返し、洋裝は大嫌ひで振袖の着物、帶、草履から細かい持物迄總べてが日本式の粹好みであつた。

其の内でも此の娘が特に好む柄があつた。其れは市松の模樣であつた。羽織から着物から帶上から手拭に到る迄此の娘の持物の殆んど總べてに多少共市松の模樣の加味して無い物は無いと云つてもいい位であつた。其れは此の娘の部屋に這入つた誰でもが直ぐに氣が附く程著しい好み方であつた。

肺炎の方は略〻正常の經過を取りつつあつたが此の娘は心臟が强くなかつた。であるから强心劑の注射が日に何本も行はれなければならなかつた。他の年

頃の娘も大抵さうであるが此娘は特に注射に敏感で注射の時には殆ど聲を立てんばかりに痛がつた。此れが其の父母に取つてはたつた一人の愛娘であるだけに傍で見て居ても自分がされるよりも痛々しく哀れに思はれるのであつた。

醫者の方から云つても同じ事で痛がる美しい娘に注射をしなければならないと云ふ事は決して氣持の好い仕事では無かつた。受持の醫者は注射の時間が來ると嫌々立ち上つて娘の病室に何か惡い事でもしに行く樣に澁々と這入つて行くのであつた。

或る朝、醫者が娘の病室に注射に行くと娘はニコニコして醫者を迎へた。何時もと大分樣子が異ふので醫者は訝かりながら娘の傍に座ると娘は自分から白い腕を捲り上げて醫者の方に差し出した。

「今日は大分大人しいですね。」

と醫者が娘の態度の變つたのはどんな心境の變化かと思ひながら訊くと、

「先生、今日の注射は此處にして下さい。」

と場所迄娘の方から指定したのであつた。醫者が其處に注射し終る迄娘は默つて我慢して居た。併しどうした理由かは訊いても笑つて答えなかつた。

其れ以來一回も娘は注射を拒みはしなかつた。拒む所か進んで腕を借して其の度に注射して貰ふ場所を一一指定した。

二三日經つと娘の白い上膊に四角い絆創膏で立派な模樣が出來て居た。「注射の市松模樣！」何と云ふ素晴らしい思ひ附きであつたらう。醫者は娘の腕に出來た絆創膏の市松模樣を見て感心した。それからは醫者も必ず市松模樣になる樣に注射して行つた。

其の市松模樣が薄汚れて來た頃娘の病氣はスッカリ全快して退院して行つた。娘から受持の若い醫者に御禮にネクタイを贈つて吳れた。其のネクタイの模樣は細かい市松模樣であつた。

使ひ

或る器械會社に通つて細かい器械の製圖等を職業として居る山口と云ふ男が或る夕刻、會社から歸つて洋服を着換えて一汗流さうと手拭ひと石鹼箱とを持つて外に出ると今年六歳になる兄の子に會つた。山口は以前から兄の家に寄食して居て其處から毎朝會社に通つて居るのであつた。

兄の子供の手に一通の手紙があつた。

「此れを秦さんの小父さんが持つて來たよ。」

子供が云つて其の手紙を山口の手に渡した。宛名は山口になつて居た。秦さんと云ふのは山口とは遠い緣で繫がつた親類であつたが住所が遠いので滅多に顏を合した事は無い。が山口と秦とは年頃も同じであるし一番氣が合つて稀にしか會はないのに非常に親しい友達であつた。

「小父さんが自分で來たのかい？」

「ああ、此れだけ私（アタイ）に渡して直ぐ歸つたんだよ。頭に繃帶をしてたよ。」

どうして自分で來たのに寄つて行かなかつたのであらう？と山口は訝りながら兎も角も開いて見ると鉛筆で亂暴に、

「急に會つて貰ひ度い事が出來た。出來るだけ早く來て吳れ。待つて居る。」

と走り書きに書いてあつた。其の左に大森の病院の名が書いてあつた。秦は大森の或る鐵工場に通つて居る職工である。

急に心配になつて來たので山口は錢湯に行くのを止めて今脫いだ洋服を着直して出掛けた。電車を省線に乘り換へる間も山口は氣の故か胸がドキドキして仕方が無かつた。

書いてある病院を探すと直き解つた。其れは秦の通つて居る鐵工場の近所の外科病院であつた。案內を乞ふと名前を云つただけで直ぐ通された。

「秦さんと云ふ方が大變貴郎を御待ち兼ねです。」
と廊下を案内しながら看護婦が云つた。
「秦はどうかしたんですか？」
「大變な怪我をしたのです。」
「怪我を？」
病室に這入るとベットの中に殆んど全身を繃帶をして秦が寢て居た。蒼白な顏をして額に玉の樣な汗を滲ませて目は閉ぢた儘、如何にも苦しさうに唸つて居た。側に菜葉服を着た職工が二人と秦の父が心配想に立つて居た。
「一體どうしたのですか？」
と山口が訊くと秦の父と同僚が交り番に說明して吳れた。其れに依ると今日午後、クレーンに上つて仕事をして居る中に足を踏み外して三十尺の高所から落ちて大腿骨折と腦震盪を起して此處に擔ぎ込まれたと云ふ事であつた。結果

はどんな具合かと云ふと非常に惡いと云ふ。落ちた時に頭を强く打つたのが殆んど致命傷で生命危篤と云ふ狀態であつた。
若い醫者が這入つて來て秦の脈と目を開いて見て首を振つて出て行つた。
「如何でせうか？」と後から追つて出た山口が醫者に聞くと、
「とても見込は無いね。」と云つた。其の後から秦の父が出て來た。
「どんなもんでせう。」
「サア。今の醫者はいけなさうな事を云ひましたが。……隨分御驚きだつたでせう。」
「全く突然で何が何やらサッパリ見當が附かない位でして。其れにしてもよく早く御見舞下すつて有難う。彼奴（アレ）も貴郎に來て貰つたら喜ぶ事でせう。工場の方からでも通知があつたのですか？」
「いいえ、手紙を持つて秦さんが來たと冰坊が云つて居ましたが。」

秦の父が不思議想な顔をして山口の顔を見た。山口も何か妙な氣持になつて居た。此れだけの怪我をして病院に這入つて居る秦が自分で來たとは山口にも思はれなかつた。

「秦さんが怪我をしたのは何時頃でしたか？」

「何でも工場の退ける直ぐ前だと云ひますから四時頃だつたでせう。家に工場の者が使ひに來たのは五時頃でしたから。」

山口が兄の子から手紙を受け取つたのも會社から歸つてからであるから五時半頃であつたらう。

「秦さんが來るわけは無い筈だナ。」山口が獨り言を云ふと、

「そりや彼奴が自分で行くわけはありませんや。工場を途中で抜ける事も無いし病院には工場から戸板で擔ぎ込まれたんですからね。」

兄の子は或ひは同じ菜葉服を着た職工を秦と間違へたかも知れないと山口は

考へた。然し彼の手紙は確かに秦の手跡に違ひ無かつた。ポケットを探したが着物の袂に入れて洋服と着替えて來て了つたらしいので其處には無かつた。何となく不思議な氣分に襲はれて山口は秦の父と一緒に又病室に這入つた。

秦はもう少しも意識が無い様に思はれた。唸るのは止んで居たが顔色が前より蒼黒くなつて居た。

「工場から私の所へ誰か知らせに手紙を持つて來て呉れたんですか？」

と山口は側に立つて居る職工の一人に訊いた。

「知りませんね。秦さんの家の外には誰も行た様子は無つた様でしたがね。」

「誰れが來たんだらう。秦さんの手紙にや違ひ無かつたが。」

「手紙？」

「ええ、手紙を呉れたんですがね。秦さんが自分で持つて來たと子供は云つてましたが。」

職工は二人で顔を見合せた。

「そう云や先刻此處に擔ぎ込まれた時に秦さんは手紙、手紙と頻りに云ふので紙と鉛筆を渡しましたがね。」

「秦さんは其れを書いたんですか？」

「何か書いてた樣でしたよ。」

「其れは何處にありますか？」

四人でベットの周圍を探して見たが手紙らしい物は何處にも無かつた。

「何しろ此方も慌てて居たし其の後手當や注射で一騒ぎしたもんだから。」

と職工が云つた。

秦は其の夜の明けぬ内に死んだ。

山口が自分の家に歸つて着物の袂や方々を探して見たが其の夕刻秦から貰つた手紙は何處からも出ては來なかつた。

指の跡

二十歳になる藝者が御座敷で喀血して其處から病院に擔ぎ込まれた。

病室に落ち附いたと思ふ間も無く又大量の喀血をした。顔色は藝者特有の不健康な蒼白さに喀血と其の恐怖の爲めに殊更貧血して氣味の惡い位に透き通つて眼の周圍には薄黒い隈が出て居た。目鼻立ちの整つた美しい顔であつたが喀血の恐怖に痛々しい迄に一度に年齢を經つた樣に窶れて見えた。

胸を見ると兩肺共結核に蝕まれ盡して到底恢復するとは思はれなかつた。

「死に度くない。死に度くない。先生、助けて下さい。未だ妾は死に度くない。」診察して居る中に患者は非常に興奮して醫者に訴へた。

「大丈夫です。落ち附いて安心して居なさい。騒ぐと病氣の爲めに大變惡いのですから。」

醫者は患者を宥めるのに骨が折れた。

注射や診察の度に患者は醫者に向つて、

「死に度くない。死に度くない。先生どうぞ助けて下さい。」

と繰り返した。時には醫者が、

「貴女はもう到底助からないのだから見つとも無い慌て方をしないで落ち附いて覺悟を決めて死を待ちなさい。」と云つてやり度い程であつた。

呼吸困難が起つて注射の回數も殖えた。患者は興奮して夜も眼が冴えて眠れなかつた。熱が出て食慾が無かつた。患者は非常な不安に襲はれて騒ぐので病氣の方は益々惡くなつて行つた。

其の後も四日間に三四回の小喀血を見た。其の度に患者は極度に狼狽して泣き叫ばんばかりに嘆き悲しんだ。醫者を幾度も呼んで、

「死に度くない。助けて下さい。」と繰り返した。

然し進み過ぎた胸の變化は到底助かる可くも無かつた。後は只時間の問題とされて居た。誰もが其れを患者に云つたわけでは無かつたが患者は此の病氣特有の敏感さから周圍の人々の態度で己の運命を豫知して看護婦に向つても、

「妾死に度くないからどうぞ助けて下さい。どんな事でもしますから助かる方法を教へて下さい。」と頼んだりした。

或る夜、呼吸困難が激しくなつた。呼ばれた醫者が行つて見るともう脉搏も輕微で不整を來して居た。然も患者の意識は全く明瞭であつた。

「先生助けて下さい。妾この儘死に度くはない。此の儘死んだら妾は浮かばれません。妾は未だ死ななければならない程年を經つては居りません。妾を此の儘殺す様だつたら先生、妾は貴郎を怨みます。どうぞ助けて下さい。どんなにでも御恩に着ます。御願ひです。拜みます。死なせないで下さい。」

と醫者を掻き口説いた。併し如何に口説かれても醫者の力で人の生命を自由

にする事は出來なかつた。患者の容態が刻々に惡化して行つた。
最後の注射をし終つた醫者の腕に瀕死の病人が必死の力で縋り附いた。
「先生、死に度くない。」
と患者が云つた。醫者はジッと患者の様子を見て居た。注射の反應も表れなかつた。患者は醫者の腕を握つた儘死んで行つた。患者の最後の執心の力の籠つた指は醫者の腕から仲々離れ様とはしなかつた。醫者は職業的の冷靜さで死んだ女の指を一本一本解いて行つた。
醫者は騷ぎながら死んで行つた女の部屋を寂しい氣持で出るとシンとした夜中の廊下を通つて醫局に歸つた。醫局の椅子にボッンと一人腰を下して診察着の下の腕を出して見ると強い力で握られた場所に薄紅い痕が附いて居た。醫者は暫くの間、其の指の跡をボンヤリと眺めながら死に度くなかつた若い美しい女の一生を考へて居た。

しびれ

脚氣の患者を診て居る醫者があつた。
患者は四十歳の婦人でしびれが切れて足が浮腫んで困ると云ふ。歩くと息切れがして苦しいから御面倒でも往診を御願ひし度いと初めに斷つて來た。診察すると立派な浮腫性脚氣なので其の日からヴイタミン・Bの注射を初めた。一日置きに往診して注射を續けて行く中に段々に患者は快方に向つて浮腫も倦怠感も感覺異狀も心悸亢進も注射毎に取れて來るし、他覺的にも心臟濁音界擴大、收縮期雜音、又は肺動脈第二音旺盛等の徵候も取れて來たので患者は勿論、醫師自身も內心喜んで居た。
往診の數が重なる毎に醫者は家人とも心易くなつて診察を濟ますと可成り長い間、世間話し等もして來る様になつた。

或る日醫者は診察後、話しに油が乘つて大分長い間尻を落ち付けて話し込んだ。其の日に醫者は、「自分も若い頃から脚氣で惱まされて居るから同病患者に對しては特に同情を持つて居る事。しびれも始終あるが今では氣にも止めて居ない事。餘り長く座つて居ると全く感覺が無くなつて了ふ事。酷くなると友人の醫者に注射して貰ふが氣を付けて居さへすれば決して脚氣は危險な病氣では無い事。」等を話した。

「どうぞ、先生御樂に遊ばして。脚氣がありましたら猶更御樂に。」

と患者が云つた。

「ナーニ、大丈夫ですよ。私共は馴れて居るんですから。併し大分長い事お喋りをしました。では御暇します。大體もう癒つて居りますから御心配ありません。何卒それでは御大事に。」醫者は挨拶して立ち上つた。すると先刻からしびれが來て居た兩脚が棒の樣に固くなつて全く感覺が無くなつて居るのに氣

が付いた。併し醫者は患者の手前又、今云つた自分の言葉の手前、さあらぬ體に裝つて跛の樣に重い足を引き擦りながら部屋を出た。

惡い事に病室は二階であつて下に下りるには急勾配の高い階段を下らなければならなかつた。醫者は階段の上に立つてチヨツと躊躇した。實は此處で少しの間休んで足を揉むなり叩くなりして痲痺した足の感覺を取り戻し度かつたのである。併し後ろを見ると自分の鞄を持つて女中が尾いて來る。其處で醫者は觀念して全神經を足に込めて一歩を第一の階段の上に下して見た。

併し情けない事にクタクタに弛緩して居た足と膝の關節は脆くもガクリと崩れて、アツと云ふ間に足を踏み外して石でも轉がした樣に大きな響きを立てゝ一番下迄轉がり落ちた。

打つた脇腹の痛みの爲めに醫者は階段の下で暫くの間は動く事も口を利く事も出來ずに蹲つて居た。

僻み

毎晩續けて起されたのが崇つて醫者の癖に風邪を引いて寢て了つた。
大した事は無いが熱が三十八度程あつて頭痛が激しく氣管枝炎を起して寢て了つたのである。患者の事も氣になるが癒る迄は仕方があるまいと觀念して寢て了つた。毎日往診して居る家にはそれぞれ電話と使ひで其の由を告げ家に來る患者には氣の毒だが外所の醫者に行つて貰ふ様に斷つた。
午後になる迄ウトウトと眠つては覺め、覺めては眠つた。檢溫して見ると午後四時には三十八度五分迄上つて、アンギナの爲めに咽頭が痛む。
夕刻の六時頃、何と無く物騷がしい聲にフト淺い眠りから醒めた。外かと思つて耳を欹てて聞くと外では無い、確かに家の中で起る聲である。其れも男の可成り大きな聲で話して居る様子は荒々しく呶鳴つて居るとしか思はれない。

暫く默つて聞いて居たがグドグドと其の爭ひは絶えそうも無いので枕元の鈴を押して家人を呼んだ。聞いて見ると、
「××と云ふ家から迎ひに來て子供が熱が出たから直ぐ來て呉れと云ふ。先生が病氣の由を告げて丁寧に斷つたが、どう感違ひしたか故意に行かぬ様に考へてどうしても來て呉れと云つて聞かない。どんなに遲くなつても構はない。起きて待つて居るから來てくれ。若し其れでも斷るならば此方にも量見があるから其の積りで居て貰ひ度い。」
と威猛高になつて呶鳴るので氣の小さい看護婦等は蒼くなつて震へ上つて居るのである。××と云ふのは以前から家に來る患者であるが病氣の度に自分の家のお抱えの醫者の様に往診させたり治療を受けたり勝手な事ばかりして居る癖に一度も醫療費を拂つた事が無い。請求しても知らん顏をして居て病氣で無い時に會ふと横を向いて知らん顏をする。家はテキ家で若い男が何時も一人や

二人ゴロゴロして居て今玄關に來て居るのも其の一人である。もう一度同じ事を云はせて幾ら待つて居ても今日は行かれないからと斷らせると、

「ヨシ！後で後悔するな。」

と凄文句を殘して玄關の戶を荒々しく開けて出て行つて了つた。

「困つた奴だ。ああ云ふ向ふ見ずで無鐵砲で横着で狡猾な奴に會つちや敵はない。煮ても燒いても食へぬと云ふのはあんなのを云ふのだらう。」

等と床の中で考へて居た。同時に弱い者と見れば脅かす男の卑怯と横着を多分に憤慨して居た。

暫くすると又其の男がやつて來た。今度は御苦勞樣にも巡査を連れて來た。

「貧乏人だと見ると往診を斷る横着醫者は此處です。醫者は往診を斷る權利は無いんだ。よく調べて下さい。」と云つて居る。看護婦は泣き出さんばかりに恐れてオドオドして居る。此方は貧乏人だから行かないのでは無い。横着な

のでも勿論無い。又理由無く診療を拒んでも居ない。病氣だから行かれないのだ。一錢も拂ひもせぬ癖に生意氣な事を云つて、と此の時ばかりは心の中は憤滿に鬱勃と其れで無くとも熱のある血が煮え返る樣に興奮して、病氣の身も忘れて起き上つて玄關に飛び出して其の男の横面をグワンと一つ毆り付けてやり度い衝動に驅られる位であつた。

巡査にも同じ事を云つて、もう一度斷つた。巡査は兩方の云ふ事を聞いてニコニコ笑つて居たがやがて、

「先生が病氣なら仕方が無いぢやないか。」と云つて出て行つたそうだ。

男は未だ諦め切れずブツブツと思ひ切り惡く口の中で毒舌を繰り返しながら挨拶もせずに玄關の戶をバターンと閉めて出て行つて了つた。

辨當箱

其の女の兒は八歲であつたが早生れであつたのでもう二年であつた。

小學校に上つた時に買つた辨當箱は加速度的に殖えて行く學齡期の小兒の食慾を滿たすにはもう不足な程、小さくなつて居た。

春の運動會が其の兒の學校でも明治神宮の外苑で行はれる事になつて居た前日、少女は母にせがんで新しい辨當箱を買つて貰ふ約束をした。其れにはお隣りの席の××さんと同じ樣に撫子の模樣の付いたアルミニユームの辨當箱がいいと云つた。

姉が出て其の夜、少女の望む辨當箱を買つて來て吳れた。少女は喜んで其れを自分の枕元に置いて寢た。

翌朝、母の心盡しで美味しい海苔卷きが其の辨當箱に澤山詰められた。其れ

を持つて少女は喜び勇んで出掛けて行つた。

歩いて行くと腰に下げた辨當箱がカタカタと鳴つた。少女はお午に其れを解いて仲の良い××さんと一緒に食べる時の事を想像した。××さんが驚いて喜ぶだらう。「アラ、妾のと同(オン)なじだわ！」と叫ぶに違ひ無い。蓋を開けると美味しい海苔卷きが出る。素敵、素敵！

少女は兎の樣にピヨンピヨンと跳ねて道を急いだ。

電車通りに出た。電車の後から走つて道を横切らうとした。

と、疾風の樣に反對側から走つて來た自動車に、交はす間も無く跳ね飛ばされて急ブレーキと共に左にハンドルを切つた前輪に轢き倒された。

總べてが一瞬の中に起つた出來事であつた。人々が集り巡査が飛んで來た。興奮に蒼白になつた運轉手が少女を車體の下から抱き上げて、巡査と一緒に車に乘せて病院に走つて行つた。少女が助からうとは見て居た誰でもが想像出來

る事では無かつた。
自轉車が去つて人々が散つた後に、轢き潰されて平らになつた新らしい撫子の辨當箱が、「二年二組△△子」と書かれた茶色い小さな名札と共に土に塗れて落ちて居た。

コックリさん

子供の時に遊んだ友達で私より三年下の子に新ちやんと呼ぶ子供が居た。瘦せて黄色い顔をして柄も小さく幾らか高慢しやくれた所があつた。元氣な子でピチピチして居て動作が栗鼠の樣に素速しこかつた。其の新ちやんの妹に久ちやんと云ふ妹が居て此れも小さくて可愛いい顔をして居たが蒼白かつた。
此の二人の子供が私に或る時、珍らしい事をして見せて吳れた。一尺程の棒三本を中央邊で縛つて立て、其の上に盆を一つ倒に載せる。其の盆の隅を三人の人が三方から右手で輕く壓えて新ちやんが、
「コックリさん、コックリさん。今日は幾日で御座いませう。」と盆に向つて云ふと生無き盆が宛も其れに答へる如く自然に動き出すのである。十五日なら十五・十日なら十動いて盆はピタリと止る。止ると力を加へても動かない。